

## 教師の中年期の危機と再生(Ⅱ)

—北原豊のライフストーリーを通して—

高井良健一

### **A Case Study of Narrative Research Focussed upon a Japanese Mid-Career Teacher's Experience (Ⅱ) : Exploring the Life Story of Mr. Kitahara Yutaka Kenichi TAKAIRA**

#### **Abstract**

This report focuses upon inquiring how a mid-career high school teacher copes with one's mid-career crisis as a teaching profession in this difficult era. Teachers have suffered for so many and inconsistent educational reforms executed by government since the 1990's in Japan. Teacher's stress is increasing gradually during the period of these educational reforms.

Therefore now it is more difficult for teachers to promote their professional developments than before. However some teachers seem to realize their professional developments as reflective practitioners despite such a difficult situation. I explore a life story of a public high school teacher who has promoted his professional development by reconstructing his own teaching and professional identity. In this case study I try to show the possibility and difficulty of teacher's professional development in this knowledge based society.

#### はじめに

本研究は、日本において新自由主義による高校教育改革が行われた1990年代から2000年代にかけて、教職生活の中年期を迎えた一人の公立高等学校の教師のライフストーリーを題材として、激動する時代のなかでの高校教師の専門的成長についての考察を試みた事例研究である。

グローバリズムに伴う新自由主義による教育改革は、日本のみならず、世界的に見られる現象である。たとえば、1980年代にイギリスのサッチャー政権の下で行われた教育改革は、ナショナル・カリキュラムや学校選択制の導入などを通して、新保守主義と新自由主義による公教育の政治的統制と自由競争の両立を目指したものであった。ところが、このイギリスの教育改革は、思うような成果を挙げることができたとはいえず、学校間の格差の拡大や優秀な若者の教職離れを引き起こすという結果を招いている<sup>1)</sup>。

このような官僚的統制による教師の脱専門化と、学校間の競争を軸とするチープな（安上がりの）教育改革は、21世紀の知識基盤社会に対応する教育の質の向上にはつながらず、イギリスにおいても1997年に成立した労働党のブレア政権の下では、国家の教育予算を増やし、排除の教育から包摂の教育への転換を図るなど、新たな試みが行われている。

ところで、新自由主義による選択と競争を原理とする教育改革が国際的に主流であった1990年代に、学校教育に平等の原理を浸透させ、教育現場に大きな裁量権をもたせることで、教師たちの専門性と自律性を高め、これらの資源を多様な子どもたちが協働で学びを行う授業の創造に向けることによって、教育の質を高めようとしていた国があった。その国こそフィンランドである。1994年に29歳の若さで教育大臣に就任したオッリペッカ・ヘイノネンの指揮の下、フィンランドは教育機会の平等という哲学の下に、一クラスサイズの少人数化や教員養成の高度化ならびに教師によるカリキュラムの自由化を推し進め、他者への信頼を回復し、子どもたちの学びの柔軟性を内包する教育システムを構築していった<sup>2)</sup>。

このような平等の原理による教育改革を行ってきたフィンランドが2000年に行われたOECD加盟国によるPISA学力調査において、世界第一位の卓抜した成績を収めたことで、公正性（平等であること）と卓越性（優秀であること）は相反するという従来の教育における常識は問い直されることとなった。

そして、学校間の競争を軸とする新自由主義による教育改革は、むしろ“後進国型”の教育改革のモデルであり、産業社会から知識基盤社会に移行しつつある現状に逆行する政策であることが明らかになりつつある。このように1980年代以降の国際的な教育改革が歴史の審判を受けつつある現在においてなお、日本では1980年代の臨時教育審議会において提唱された、教育の規制緩和や自由化というような素朴な理念がいまだに教育改革の原理として健在であるという状況が続いている。その結果、現在にいたるまで教育改革は、さまざまな「教育問題」にかこつけては、公教育の画一性や教師の守旧性を攻撃するというかたちで進行している。そもそも一人ひとりの子どもたちの学びや居場所を保証するという意味においては以前から決して盤石とはいえなかった日本の公教育は、“改革派”によって攻撃されることで、さらに脆弱となり、教師のアイデンティティの危機、子どもたちの学びや居場所の危機が高まっている。

以上のような歴史的背景の下で、かつて“進歩派”と呼ばれていた高校教師たちは、高校

教育改革の構図のなかで、学校の統廃合や教育の多様化や個性化に反対し、普通教育に固執する“守旧派”に変えられ、教職アイデンティティの危機に直面している。本研究で叙述する公立高校の教師である北原豊（仮名）は、まさにそのような教師の一人であり、教職生活における中年期において、高校教育改革の渦中に立たされ、そこでさまざまな危機が重なり、深刻な危機に遭遇することになる。

しかしながら、その危機のなかでの大病と時間意識の変容、さらには大学院での学びが教職アイデンティティの再構築を生み出し、困難な環境をくぐり抜けることによって、知識基盤社会にふさわしい高校教師へと変容をとげている。北原のライフストーリーをもとに再構成されたライフヒストリーは、一人の高校教師の語りと経験を通して、教師にとっての中年期の意味を問うとともに、日本の高校教育改革を逆照射する試みである。

なお、叙述にあたっては、教師名、学校名、著書名、論文名など、すべて仮名を用いている。ただし、影響を受けた著名な人物については、実名で記載している。

## 第一章 ライフストーリーのエスノグラフィ

### 第一節 ライフストーリーの概略

本研究では、関東地方の公立高校の社会科教師である北原<sup>きたはらゆたか</sup>豊のライフストーリーをライフヒストリーとして叙述する。まず北原のライフストーリーを簡単に紹介しよう。北原は1960年に北海道の道東地方で生を受けている。父は長距離トラックの運転手であり、母はパートタイムで仕事をしていた。小学校の頃から文章を書くのが好きで教師のすすめで壁新聞を作成したりしている。中学時代には学校内で人間関係の難しさに直面することもあったが、父のトラックの助手席に乗り、校外のさまざまな大人たちと出会うことにより、困難な時期を乗り越えていった。旅を通じた、多元的なアイデンティティの形成は、こうした原体験ともつながっている。

学校祭にあこがれて、隣接する市の高校に進学したが、共通一次試験の開始に伴う学校の進学体制の導入のために、学校祭は縮小され、その挫折感からキャンディーズのファンクラブ結成にエネルギーを向ける。1979年には、高校時代の教師との出会いをきっかけとして、東京のC大学に進学、そこで竹内常一、里見実といった教育学者たちと出会う。大学卒業後、1983年には北海道の離島の学校に赴任、そこで新任教師として校内暴力の洗礼を受ける。この後、北海道各地の三校を経験したのち、家庭の事情で関東地方の教員採用試験を受験し、1999年からは県立希望ヶ丘高校に着任している。

北原のライフストーリーは、社会科教師としてのアイデンティティと、旅人としてのアイデンティティが両輪となっている。この両輪の上に、異文化をつなぐ教師というアイデンティティが立ち上がり、カンボジアの子どもたちを支援するNPOを主宰したり、朝鮮人学

校の生徒たちとの交流を企画するなど、地球市民を育てる教育活動に力を注いでいる。こうした経験を土台として、2001年には9・11同時多発テロのあと、多くの高校で沖縄修学旅行のキャンセルが相次ぐなか、困難を乗り越えて、中止の危機にあった沖縄修学旅行を実現している。北原のヴィジョンは、教科や国境を越えて、生徒たちも、教師たちも学び合うという、越境する学びにある。

## 第二節 ライフストーリーの舞台

北原へのインタビューのうち、メインとなるインタビューは、2004年の3月に行われた。このとき、北原は43歳であった。そして、インタビューを行った筆者は36歳であった。ちょうどこの年、筆者は、客員研究員としてイギリスのイースト・アングリア大学で国外研究を行っていた。2003年4月から2005年3月までの2年間の国外研究であったが、2004年春の一時帰国中に、北原のインタビューを行ったのである。

ところで、北原と筆者との出会いは、北海道のインフォーマルな教育研究サークルのソクラテスの会を媒介としている。ソクラテスの会は高校の倫理教師たちの集まりであり、北原はその創設以来の中心的なメンバーであった。ソクラテスの会の創設者である北海道の高校教師である野々村厚夫が一日だけ東京大学大学院の佐藤学ゼミナールに出席したことをきっかけとして、筆者は1997年1月にはじめて北海道立教育研究所で行われたソクラテスの会の自主研修会に参加している。その後、1999年の夏に筆者の大学のゼミナールとソクラテスの会との合同研修会を北海道大学のキャンパスで行い、この時に北原と筆者ははじめて出会っている。

北原はその後、関東地方のF県に移り、その後、筆者はほぼ毎年、大学の教職課程の授業に北原をゲスト講師として招聘している。北原の教育実践と語りの厚みに魅了される学生たちも多く、なかにはいつか北原の聞き取りをしたいと考えている学生たちもいる。

この日のインタビューは、F県の当時の北原の自宅近くの落ち着いた雰囲気のある喫茶店で行われた。はじめは、北原の奥様と二人のお子さんも同席されて、しばらくの間、会話が弾んだ。そして、インタビューの時間になって三名が退席すると、北原と筆者は向かい合うかたちで1対1になった。その後は、喫茶店というオープンな空間であったが、お互いインタビューに入り込み、集中した時間を過ごしている。

なお、ライフストーリーを完成させるために、希望ヶ丘高校時代の聞き取りを補足することが必要だということが明らかになり、2010年5月に追加のインタビューを行っている。この追加のインタビューは、東京経済大学の筆者の研究室で行われた。

## 第三節 〈会話〉・〈ストーリー領域〉・〈物語世界〉

社会学者の桜井厚によると、ライフストーリーのインタビューは、〈会話〉・〈ストーリー領

域)・〈物語世界〉の三つの領域に分けられる。ところが、北原のインタビューでは、〈会話〉と〈ストーリー領域〉と〈物語世界〉の境界はしばしば越境される。

2004年のインタビューの出だしは次のようなものである。

「僕が採用されたのが83年なのですね。83年に採用されて、先程お話しした通り、最初の年は挫折の連続というのか、自分と生徒が接点を見つけることが困難だった1年だったなあとというふうに。最初の半年近くは辞めることばかり考えていましたし、自分なりの肯定感、自分うまくいくんじゃないかという予想をことごとく外れるというのか、やっぱりそれに時代背景があったのかなと考えると、校内暴力ですね。そして、その背景には、どうして80年代の前半にあれほど校内暴力がピークに達したのか。でも、それは本当の原因にちゃんと対応したような解決のされ方をしたのかというのが、僕はすごく疑問なんですよ。」<sup>3)</sup>

〈会話〉から急遽〈物語世界〉に入ってしまう、重要な物語が語られてしまった。そこで慌ててインタビュアーはテープレコーダーのスイッチを入れて、あとでインフォーマントに断りを入れている。続いて、スイッチを入れたあとで、語りは〈物語世界〉からすぐに〈ストーリー領域〉に移行している。すなわち、ここで語られている「やっぱりそれに時代背景があったのかなと考えると、校内暴力ですね」という語りは、すでに生の経験そのものについての物語ではなく、経験の解釈となっているのである。これに続く、「そして、その背景には、どうして80年代の前半にあれほど校内暴力がピークに達したのか」という語りは、新たな問題設定となっている。

つまり、語り手の〈物語世界〉は、経験の解釈である〈ストーリー領域〉と深く絡み合っている。インタビューの場において〈ストーリー領域〉が立ち上がってくるというよりも、〈ストーリー領域〉がすでに〈物語世界〉に絡みつき、この二つが合わさって物語化されていたといえる。

そのため、インタビューは対話によって〈ストーリー領域〉を立ち上げるというのではなく、むしろ対話によってすでにつくられている〈ストーリー領域〉を解体しながら、その向こうにある〈物語世界〉に接近するという方法で行われた。

#### 第四節 ライフストーリーの語り直し

このように北原は自らのライフストーリーを明確な筋書きの上に所有している教師である。その一つの理由として、北原が所属するソクラテスの会が、ナラティブ・コミュニティー、すなわち語りの共同体であることが挙げられるだろう。自主研修会であるソクラテスの会では、自分語りが研修の中心的方法に据えられている。自らがどうして教師になったのかと

いう問いを、この共同体のメンバーは教師としてのもっとも重要な問いとして共有しており、各々その語りのなかで表現することを期待されている。そして、ソクラテスの会における実践報告では、教育実践とその教師の個人史の関係が物語の形式で語られる。同会の中心メンバーの一人である北原もまた、研究会で実践報告を行うなかで、自らのライフストーリーを何度も語り、洗練させてきたのである。

こうして生み出された北原の〈物語世界〉は、一つの「支配的な物語」を形成している。北原の〈物語世界〉を一言で表現するならばそこには「人権教師」の脚本があるといえるだろう。ここでいう「人権教師」とは、生徒の人権を何よりも優先するとともに、いつも生徒の立場に立とうとする教師のことである。

しかしながら、北原の教育実践を支える経験の豊かさと教養の厚みは、この物語の筋書きをはるかに超えている。また、当然のことながら、生徒たちも決して一枚岩ではないし、さまざまな考え方をもっている。なかには、現状に適応するのではなくつねに新しい試みに挑戦する北原に対して、反撥する生徒たちも存在するだろう。ところが、「人権教師」の脚本は、生徒を純粹無垢なものとして固定化することにより、北原の教育実践の創造性や教師の仕事のダイナミズムを平板に語らせてしまう危険性をもっているのである。

したがって、この事例においては、とくに「支配的な物語」は、「もう一つの物語」によって、組み替えられる可能性をもっており、そのことは北原の教師としての専門的成長においても意味あることだと思われる。そして、この組み替えにおいては〈ストーリー領域〉が鍵を握っている。なぜならば、〈ストーリー領域〉での過去の体験や出来事の評価を一旦ほどいて再構築することが「もう一つの物語」を立ち上げる契機となるからである。

そのために、この事例では、インタビューの方法を工夫してみた。ライフストーリー・インタビューのテキストには、インフォーマントの語りを傾聴することがもっとも大切であると記されている<sup>4)</sup>。もちろん、これは原則としてはその通りといえるのだが、今回はあえて違った方法を採用している。インタビュアーである筆者は、北原の話をとるところで止めて、話の流れを遮り、質問をした。北原はライフストーリーを淀みなく、どこまでも語り続けるタイプのインフォーマントであり、とりわけ、〈ストーリー領域〉がどこまでも語り続けられることがあった。〈ストーリー領域〉を再構築するために、筆者はとるところで語りに確認を挟んでいる。

さらに、この事例研究では、ライフストーリー・インタビューにおいて、どうして教師になったのかというすでに一つの確固たる物語が形成されている問いを、どうして教師であり続けているのかという新たな問いにずらすことを試みた。この試みは、固定化された過去の〈物語世界〉に対して、〈今ここ〉という語りの地点をもちこむことによって、ライフストーリーの語り直しを促す試みであった。

## 第二章 北原豊のライフストーリー

(時代背景) 北原は1960年に北海道の道東地方で生まれ、そこで高校時代まですごして(略年表)

西暦	節目となる出来事・教育実践における軌跡	印象に残る出会い・活動・書物
1960	誕生 北海道道東地方	
1967	小学校入学	林先生 「壁新聞」を作る。
1973	中学校入学	大山先生(社会科) 父親のトラックに同乗して北海道各地を旅する。
1976	十勝晴海高校入学	学校祭に感動する。 キャンディーズのファンクラブ
1979	C 大学法学部法律学科入学	中森先生(国語・生徒会顧問) 北海道自転車旅行 山本哲士・里見実・竹内常一 (教育学者たち) ルソー『エミール』
1983	北海道立青島高等学校赴任	生徒たち 重松守先生(倫理の研究会)
1986	北海道立日高東高等学校異動	木村純治先生(同僚) 不登校の子ども 野々村厚夫先生(倫理の研究会) ギリシャとフランスへの旅行
1993	北海道立函館南高等学校異動	広島への自転車旅行 北欧への旅行
1995	北海道立札幌向陽高等学校異動	結婚 父の介護 ベトナム・カンボジア取材旅行
1999	F 県立希望ヶ丘高等学校赴任 (関東の教員採用試験合格ののち)	菅沼茂さん(カンボジアNPO) ソクラテスの会を立ち上げる。 NPOを立ち上げる。
2011		沖縄への修学旅行
2012		ガンの手術
2003	F 大学大学院人文科学研究科入学	
2004	F 県立坂田西翔高等学校異動	

いる。語りのなかには、高度経済成長以前の日本社会の様子が見出される。北海道の各地を

父親のトラックに乗って、旅をしたこと、そして行商の人たちに出会ったこと、そこで売り物だったカニを分けてもらったこと、北原はこのような原風景を心のなかで育てながら、思春期の厳しい時代を乗り切っている。

北原が北海道で少年時代から思春期を過ごしていた頃、時代は大きく変わろうとしていた。高度経済成長はオイルショックによって終焉を迎え、日本列島は低成長の時代を迎える。雇用や経済のパイが減少することが見込まれるなかで、高校教育の中心は進学準備にシフトしつつあった。北原が大学に進学する1979年からちょうど共通一次試験が導入されることが決まり、こののち、大学の序列化がさらに進み、これに対応するかたちで教育産業が台頭することになる。

北原の大学時代は1970年末から1980年初頭にかけての時期にあたる。バブル景気の前夜を北原は東京で過ごしている。そこで、竹内常一ら教育学者との出会いを通して、困難な学校現場で奮闘する教師たちの教育実践記録に出会っている。その後、1983年に当時全国を席卷していた「校内暴力」の吹き荒れる北海道の離島の公立高校に赴任している。

さらには、1990年代には札幌の新設の公立高校において、「管理教育」に出会い、教職アイデンティティの危機を経験している。その後、家庭の事情で北海道から関東地方に移り、中途退学者の多い普通高校に赴任、そこでもさまざまな葛藤を経験しながらも歴史に残る修学旅行を実現している。北原は、公立高校一筋に、北海道で四校、関東地方で二校、いわゆる「普通」の高校生たちと向き合ってきた。時代の荒波を真っ正面から受けながら、その教職アイデンティティの危機を経験し、教職アイデンティティの再構築を行ってきた高校教師であるといえる。

#### (ステージ1) 幼少期から小中時代 ―「孤独」を癒した「表現」と「旅」―

北原は、1960年に北海道の道東地方で生まれている。父はトラックの運転手で、母は農家でデメン<sup>5)</sup>と呼ばれるパートタイムの仕事をしていた。きょうだいは妹が一人。保育園の頃から、鍵っ子で、本を読むのが楽しみだったという。

北原は、小学校時代に、このあとの人生につながる教師との出会いを経験している。一人目は、小学校3年生のときの森先生であった。森先生は北原に新聞の読み方を教えてくれた教師であった。細かいことは記憶から失われているにもかかわらず、「新聞と出会ったのは小学校3年生という強烈なイメージが」<sup>6)</sup>残っているという。そして、小学校4年生のときの教師が「壁新聞を作らせてくれ」<sup>7)</sup>たことがきっかけとなり、この時以降、高校3年生まで新聞委員を続けることになった。取材旅行、学級通信、教科通信といった、のちの教師としての教育方法の源泉は、このときの被教育体験にあると北原はとらえている。こののち、北原は自分の思いをさまざまな方法で表現するようになったのである。



「小学校時代はずっと漫画家になりたかったんですが、それもやっぱり小学校4年か5年生のとき、ルーズリーフというのが売りに出されて、ノートがバラバラになると。だから、クラスで分けて、僕が絵を描いて、ほかの子2人が絵を描いて、それをルーズリーフで東ねてクラスで廻すという雑誌を作ったんです。小学校4年生のとき。そういう表現方法を与えてくれた先生たちに、小学校時代に随分会えたんですね。」<sup>8)</sup>

中学校に進学すると、もう一人の教師との出会いがあった。社会科の大山先生との出会いであった。大山先生の授業は「語り口は柔らかく」「世界を語る」<sup>9)</sup> 授業だったという。大山先生の授業と出会うことで、北原の表現は社会的な性格を帯びるようになる。

「それがすごくね、イメージできるような語り方だったので、漫画家になりたかった僕はいつも、色鉛筆と万年筆でその情景を、浮かんだ情景を絵にして、たとえば、植民地のインドでガンジーがたたかう、非暴力でたたかう姿を描いていたりとか。教科書の写真や挿し絵を見ながら、あとはポーズは自分で考えてとか。マッカーサーの絵とか。今でもとっていますよ、そのノートは。捨てられないですよ。とくに何か資料を使うわけじゃないんですよ。ただほんとうに、こう、訥々と語る語り口が、歴史の情景が目には浮かぶような感じなんですよ。」<sup>10)</sup>

北原はゆったりとしたリズムをもった大山先生の授業に出会い、歴史を学びたいという思いをもつようになった。また、大山先生は、高校進学においても、北原の決断を支えてくれた。ほかの教師たちが統一テストの偏差値を基準として、進路指導を行っていたのに対して、大山先生は「君何したいの？」<sup>11)</sup> という問いをベースとする進路指導を行っていた。北原は、十勝晴海高校の学校祭の華やかさにあこがれていたため、大山先生に「僕は晴海で学校祭やりたい」<sup>12)</sup> と言ったという。すると、大山先生は「いいじゃないか」「やりたいものがあるんだから、いいよ」<sup>13)</sup> と背中を押してくれ、北原は十勝晴海高校に進学することになった。北原は大山先生との出会いを「この先生の影響がたぶん一番大きかったですね。決定的だといってもいい感じでしたね」<sup>14)</sup> と振り返っている。

このような印象に残る教師との出会いがあった中学時代だったが、この時代は、北原にとって、苦しくつらい時代でもあった。荒れた中学校で、学校の雰囲気を変えたいと思い、生徒会長に立候補したところ、周りの生徒たちからの反撥があり、同じクラスから対抗馬を出されて、落選してしまう。そして、このあと嫌がらせを受けるなど、苦しい時間を過ごすこととなった。この時、北原の心を救ってくれたのは旅だった。週末、父親のトラックに乗って、北海道各地を旅して、そこで出会った人々のやさしさに触れることで、再び学校へ向かうエネルギーを与えられたのである。

「さすがに僕もめげそうになったときに、やっぱりそのときに救ってくれたのは旅でしたね。父親がトラックに乗せてくれて、蒸気機関車がちょうど日本中から消えるという75年だったんですよ。だから、それを写真に撮っているとすべてを忘れられましたよね。そして、いろんな人のやさしさに出会えたというか。今、めずらしいというか、いないでしょうけど、夕張でカニを苦小牧から行商しているおばちゃんが『どこから来たの』と、『道東から来ました』と言うとびっくりして、『これ食べなさい』と新聞紙にくるんだカニくれたりとか。細かいバス賃がないときに、『おまえ、どうしたんだ』と言うから、『バス賃、細かいのがなくて』と言ったら、くれるおじさんがいたりとか、車に乗せてくれるおじさんがいたりとか。〈中略〉そういうまったく自分とは世界の違う人たちのやさしさに触れて、癒されて帰ってくるというか。それが中学校時代でしたね。」<sup>15)</sup>

学校とは別のもう一つの世界があったことで北原の孤独は救われたのである。父の労働の世界を垣間見て、社会で働いているさまざまな人々と会うことを通して、学校における自己よりも一つ大きな自己を形成し、その自己によって学校における自己を相対化することで、自らの苦しみを乗り越えていたのである。

「だから、イヤなことがあるとそうやって父親のトラックに乗せてもらって、父親の背中を見るじゃないですか。ずーと何も言わずに、6時間ずーと運転している父親をみて、横に感じながら、自分もこっちで座っていて。で、一度も僕は、最後まで起きられたことがないんですね。えらいなあと思いましたね。それこそ寝たら死んじゃいますからね。で、僕もね、張り切って最後まで起きてるぞと思うんですけどね、2時間もすればかーって寝ているんですよ、ダメですね。いつも起こされてしまったね。

イヤなことがあると金曜の晩、父親のトラックに乗って、日曜旅して、月曜の朝帰ってきて登校すると。ああ、金曜じゃない、土曜の晩ですね。当時は土曜日は授業ありましたから。土曜の晩に行って、月曜の朝に帰ってくる旅を時々していましたね。そういう逃げ場や、そういうこの世界の違う世界の人たちはもっと素敵かもしれないというのは、つねに予感としてもっていたんで、中学校時代から。」<sup>16)</sup>

今の時代であつたら不登校になることが回避できないような状況の下、トラックでの旅という避難所に身を寄せることで、思春期の北原の柔らかな自己は守られていた。

(ステージ2) 高校時代 ―「学校祭」と統制の始まり―

十勝晴海高校に進学した北原は、周りの生徒たちの挫折感としらけた雰囲気になんか失望し

たものの、学校祭の盛り上がりにはすっかり感動してしまった。

「入ってすぐ先輩が、3年生がやってきて、『君らはDチームだ、Dチームの伝統とはこうだ、学校祭ではこういうものを作る』と模型を見せられて、で、『これからはおまえたちに応援の仕方を教える』と入って何日も経たないやつにそういうことをやる。だから、3年生たちが夏休みに一生懸命バイトして後輩におごるお金を作るんですよ。そして、学校祭は9月の初旬なんですけど、夏休みが終わるやいなや午後から授業全部カットで、12時から夜9時まで作業、女子は7時まで。7時に女子帰るときに夕ご飯を炊き出しをやって帰るんですね。そして、僕らのために3年生の女の人が配る。もう感動でしたねえ。大人の女の人に配ってもらうという、何というんでしょう、淡いものがこみ上げてくる喜びですよ。」<sup>17)</sup>

このように学校祭は、北原にとって、中学校までのいさかいの絶えなかった子どもの世界を離れ、力を合わせて協働で何かを創造する大人の世界に出会い、自らの中に成熟へのあこがれが育っていった貴重な場であった。

「学校祭は5日間あるんですね。最後に、先輩に抱きかかえられるようにして、百何人が泣くという世界で。で、後夜祭が終わると、河原でジンギスカンですよ。百人単位の鍋が八つ並ぶという闇鍋コンパをやって。」<sup>18)</sup>

ここで体験した一体感は、北原にとって生涯忘れられないものであった。

「疲れ切ってみんなが9時に仕事を終わると、3年生の責任者の先輩がその夏休みに稼いだ金で、喫茶店に行ってお飯食べさせてくれて、ほんとうにうれしかったですね。先輩がいろんなことを語ってくれたんですよ。」<sup>19)</sup>

まだおおらかさが残っていた時代、低学年と高学年、女子と男子が協働しながら、一つのプロジェクトを作っていく喜び、当時の高校生たちのなかには、このような経験を通して、大人への階段を上っていった者たちもいたことだろう。共通一次試験が導入される前夜、そして校内暴力が全国を席卷する前夜の時代であった。こうした高校時代についての肯定的な記憶が、北原に高校教師の道を選ばせることになった。そして、教職に就いてからは、高校という場所の歴史的、社会的文脈の変化に伴い、北原は理想と現実の狭間で大いなる葛藤を経験することになる。

「先輩たちの間でもその絆ができて、受験の頃になると、休み時間なんかには、たとえば数学のできる先輩が数学の苦手な人たちを集めて教えているんですよ。休み時間とか、放課後とかにやって。先生なんかやっていないんですね。生徒同士でやって。」<sup>20)</sup>

このように、生徒たちの協働が生まれる雰囲気为学校だったが、高校2年になり、校長が変わったことで、学校の雰囲気は一変したという。学校祭は縮小され、学校のカリキュラムでは進学準備が重視された。だが、この変化は一人の校長の個人的な問題というような次元で生じた変化ではなかった。北原が高校2年生になった1976年に、高校進学率は92.6%に到達し、ほぼ高校全入の時代を迎えようとしていた。同年、大学進学率は38.6%に到達し、高等教育においても大衆化、マス化の段階を迎えていた。大学進学率はこのうち、1992年までほぼ横ばいとなる。高校受験は、もはや社会階層の上昇を意味するのではなく、下降しないための競争を意味するようになり、大学受験は、もはや一部のエリートたちのものではなく、高校生の多くを巻き込むものとなっていった。こうした社会の変化に伴い、高校の位置づけも変わりつつあったのである。

つまり、北原は、地域の公立高校が大人になる準備のために社会的な経験を包み込む場所として機能していた時代のしんがりのランナーであるとともに、大学受験のために統制された場所に変質した時代のトップランナーでもあったのだ。そのような時代のなかで着任した新しい校長は、学校の威信を高めるために生徒たちへの統制を強め、「いろんなものが禁止になりました」<sup>21)</sup>と北原は語る。

この「挫折感」<sup>22)</sup>の中で、北原は当時、絶大な人気を誇っていた女性歌手グループのキャンディーズに夢中になり、ファンクラブの支部を結成し、学校で満たされない思いをそこで発散していた<sup>23)</sup>。ところが、そのグループの東京での最終コンサートから戻ってきたとき、生徒会顧問の教師に声をかけられて、生徒会長を引き受けることになった。生徒の自治への統制が強まるなかで、生徒会長を希望する生徒はいなくなっていたのである。結局、引き受けてはみたものの、生徒会の仕事はうまくいかず、苦しむことになるが、このときは、ファンクラブの仲間たちの支えに励まされたという。

「(「いろいろと最初は挫折してもめげずにやっていくという、その先生の根っこの強さというのはどういうところで作られたものでしょうか」という問いに対して) 何でしょうねえ。たぶん一つ言えるのは、世界をつねに複数もっているということでしょうね。ここはダメでもほかの人たちがまた支えてくれるから、それでなんか現状維持しているうちに状況が見えてきて、また。または、発想をちょっと変えると違って見えてきて、ここからじゃあアプローチ変えてみようかというか。それは大きいですね。」<sup>24)</sup>

このように中学校以来の旅を通じた出会いや学校外での経験が、北原のなかに多元的な自己を育てていた。決して器用な性格ではなかったが、北原の誠実な思いや計算のない利他心は、かえって周りに支えてくれる人々を生み出していた。生徒会の顧問で国語教師だった中森先生もその一人であった。中森先生の授業は、「国語の授業なのに全然国語をやらずに、人生とか、愛とかいうことを、自分のC〔大学〕時代のことを題材にしゃべる」<sup>25)</sup> というものだったが、北原はこうした話から大学生活へのあこがれを育てていった。

「そのときなぜC〔大学〕を選んだのかと彼が言うのには、金田一京助がいたのですよ。金田一京助、丸谷才一、諸橋轍次、漢文の。そう、つまり、大学というのは、そういうアカデミズムで魅了される場所なんだと。」<sup>26)</sup>

そして、中森先生の影響を受けて、北原は同じC大学に進学することを決意する。

### (ステージ3) 大学時代 ―「教育学」との出会い―

しかしながら、期待に胸を膨らませて上京し、門をくぐったC大学の法律学科には「全くなじめなかった」<sup>27)</sup>。ほんとうは歴史を学びたかったということもあり、法律学科の大人数講義に自分の居場所を見出すことは難しかった。また、大学の寮でも周りとの軋轢があり、希望に満ちたものになるはずだった大学生活は閉ざされていった。せめて、大学では好きな歴史を学びたいと、文学部への転科試験を受験したが、この願いもかなわなかった。大きかった期待はすべて失望に変わっていった。失意のなかで、北原は故郷に目を向けることになる。大学2年生の夏、北海道の旅、しかも自転車での自分さがしの旅に出かけようと思いついたのである。

「2年生の夏休み、自転車のあと、開き直れたわけですよ。北海道のすばらしさとか、地元、僕にはこんなすてきな世界があったじゃないかと思ってね。〈中略〉こういう自然、あの自然に帰りたいたいと思って。北海道に帰りたいたい。それは励みになりましたよね。」<sup>28)</sup>

そして、故郷の北海道に教師として戻ることを励みとして、大学2年生の秋から教員採用試験の勉強に没頭することになる。このとき、北原は、教員採用試験の勉強を単に受験勉強として行うのではなく、教育学のさまざまな古典の原典を読んでもみようと考えた。これは教職課程の講義に触発されたためであったという。法律学科に居場所を見出すことはできなかった代わりに、新たな居場所が教職課程において見出されたのである。

「よかったのは教職課程をとったことですよね。教職課程をとったときに、教職原理の先生がのちにT大学へ行った山本哲士という先生で、イヴァン・イリッチの研究者なんですよ。で、『脱学校論』<sup>29)</sup> でしょう。それで、そんな考え方が世の中にあるのかということで、そもそも学校とは何か。その頃に、里見[実]先生がCにいて、彼の授業のことを、彼の教育原理をとっている僕の同僚の人が言うんですよ、すばらしい先生だと。で、里見先生の本を読んで。それから、その頃は、灰谷健次郎さんが出てきた頃なんですよ。『兎の眼』<sup>30)</sup> で教育って何だろうということを考え出した時期で。ですから、『バラサン岬に吼えろ』<sup>31)</sup> というのもその頃読んだんですよ。北海道の教育について。で、そのときに思いついたのが、法律学科で、結局法律ははじめなかったんですよ。でも、考えたら、独学できるんだということで、2年生の秋から『エミール』を読み始めたんですよ。ルソーの。』<sup>32)</sup>

この当時のC大学の教職課程には、非常勤講師の山本哲士のほか、里見実、竹内常一といったそうそうたる教育学者たちが集っていた。この当時の山本は、イリッチが主宰するメキシコ国際文化資料センター(CIODC)で3年間にわたって研究活動を行ったのち日本に帰国し、ちょうど教壇に立ち始めた時期であった。また、パウロ・フレイレの研究者としても知られる里見は、学校における学びを伝達から対話へと組み替える思索を続けていた。そして、竹内は、全国生活指導研究協議会(全生研)、高校生活指導研究協議会(高生研)の理論的指導者として、四十代半ばの生産的な時期を迎えようとしていた。

近代の制度としての学校教育を批判的に考察する教育学者たちとの出会いは、失意のなかにあった北原を励ますものであった。北原は彼らとの出会いをきっかけとして、教育学の古典に目が開かれていく。そして、まず紐解いたのが近代の教育学の祖であるジャン・ジャック・ルソーの『エミール』であった。この時に出会ったルソーの『エミール』を手がかりとして、北原の学びの世界は一気に開けていく。

北原は、近代教育学を批判する立場の教育学者との出会いによって読み始めた『エミール』に夢中になり、結局、古代ギリシャの教育思想とも連なる近代教育学を自分のものにしてしまった。決して社会的、経済的に恵まれているわけではない地域、家庭に育ち、学校における教師との出会いによって、自分自身の人生の階段を一步一步上っていった北原にとって、ポストモダニズムよりも近代の市民社会を準備したヨーロッパ思想に惹かれたのは、いわば当然のなりゆきであった。そして、この学びの経験は、北原の教職生活において、一つの軸を形成することになった。

のちに教師になってから、北原は市民大学講座の講師を務めている。そのなかには「エミールを読む会・24回」というものがある。倫理の教師としての知識面での土台もまた、このときに準備されたといえるだろう。大学3年から4年にかけての時期は、学びの面で大

きな転機であった。

「大学生のときはそうやって、ほんとうに発想が変わりましたよね。法律はもうほんとうに卒業に必要なだけ単位とって、大学3年のときは、好きな先生、ほんとうに授業を見て面白い先生ばかり集めて。〈中略〉3年生のときはとにかく興味、関心が広がったので・・・あれは転機でしたね。僕はだから、法律学部だけど、心は教育学部」<sup>33)</sup>

そして、大学4年生になり、あこがれていた竹内常一の授業に参加する。北原は、竹内の授業を通して、中学、高校のさまざまな教育実践に出会うことになる<sup>34)</sup>。そのとき、ともに学んだ仲間たちは、10人のうち8人までが教師になったという。そして、竹内の授業で経験したグループワークの方法は、のちに北原の授業の手法の一つになっている。こうして北原は、同じ教職を志す共同体を見出し、いつしか大学内に居場所を得るようになっていた。教職課程の総仕上げである教育実習は、母校の北海道十勝晴海高校で行った。

そもそも北原は高校時代に受けた社会科の授業に対して大きな不満をもっていた。中学時代の大山先生の社会科は世界を読み解くことにつながる授業であったが、高校時代の社会科は大学受験のための暗記の授業であったからだ。そうであったから、教育実習では世界を読み解く授業に挑戦しようと考えた。北原が教育実習を行ったのは、ちょうど現代社会が教育課程に組み込まれた1982年のことであり、北原は教育実習でいきなり現代社会を担当することになった。大学で学びの目が開かれ始めていた北原は、「ファシズムとは何か」というテーマで授業を試みるが、与えられた時間はわずかに2週間で2時間しかなかった。何とか交渉して4時間にしてもらったというが、高校時代と同じように、指導教諭との問題関心の隔たりは大きかった。

教育実習が終わったあと、教員採用試験を受験した。これまでの地道な努力が実り、現役で北海道の教員採用試験に合格し、卒業とともに、北海道の北のはて、青島にある青島高校に社会科教師として赴任する。1983年の春のことであった。

#### (ステージ4) 青島高校(一) ―リアリティ・ショックと「校内暴力」―

希望に満ちて赴任したのはじめての学校、しかも離島の学校ということであれば、多くの人々が若い青年教師と純朴な子どもたちとの親和的な関係を思い描くことだろう。しかしながら、北原の教職生活のはじめの1年は、毎日がリアリティ・ショックの連続であった。

大学時代に、竹内常一の授業において、厳しい状況のなかで学びを生み出している中学、高校教師の実践記録に出会っていた。だから、どんな学校であっても心の準備はできているつもりだった。しかしながら、新任の教師がすぐに同じような実践に到達できるほど、教職の仕事は簡単なものではなかった。北原の授業、言葉は青島高校の子どもたちには届いてい

かなかったのである。

「まったく通用しなかったです。やっぱり僕のやっている授業は、頭に十勝晴海の生徒のレベル、十勝晴海の生徒のように暗記教育でも受けとめてくれる、静かに聞いてくれる、不満な授業があっても、心の中では何言っているかわからないけど、表面には出さない、進学校の生徒ですよ。」<sup>35)</sup>

教師にとって、被教育体験、すなわちこれまで受けてきた授業は、深く身体化されているものである。たとえ大学時代に教育理論を学んだからといって、自らの身体的な経験を再構築することは容易なことではない。北原もまた、被教育体験のもつ圧倒的な力を感じていた。高校時代の北原は、学校祭を通して他の生徒たちとの協働の喜びを経験したのだが、授業においては学びの喜びを感じることは少なかった。教師となった今、北原は新たに一つひとつたしかな授業を創っていくことを迫られたのである。

「[受験のためと言っても]まったく通用しないです。それから大学の話をすると、それは嫌みにしか聞こえないし、楽しい思い出といっても、それはあんたは楽しかったでしょう、で終わってしまうし」<sup>36)</sup>

先述したように、北原のはじめての教育実践に反映されたのは、大学時代の学びというよりも、高校時代に自らが受けた教育であった。北原は、高校時代に自らが受けてきた社会科の授業のように知識の暗記を中心とする授業を行い、また生徒会顧問で国語教師だった中森先生のように自分の大学時代を語ったのである。そして、この教育の方法は、北原の高校時代とは異なる社会的、文化的な文脈に生きる生徒たちにはまったく通用しなかった。このように学びの履歴において大学時代に大きな転機を経験した北原でさえも、日常の積み重ねであるところの被教育体験の呪縛は大きかった。教職生活のスタートは、これまでの学びと学びを通して形成してきた自己が否定され続けるような苦しい日々であった。

「最初の年は挫折の連続というのか、自分と生徒が接点を見つけることが困難だった1年だったなあというふうに。最初の半年近くは辞めることばかり考えていましたし、自分なりの肯定感、自分はうまくいくんじゃないかという予想がごとごとく外れる」<sup>37)</sup>

この物語はインタビューの冒頭に語られたものである。それだけ北原にとって、大きな意味をもつ経験であったといえよう。この経験はリアリティ・ショックと呼ぶのがふさわしく、まさしく教職生活における最初の危機であった。だが、同時に、このリアリティ・ショック



は、北原が自らの育った文化的な文脈を相対化するために必要な経験でもあった。

子どもという異文化と出会う教師は、どこかで自らの文化的な文脈を相対化することが求められる。だが、この相対化には苦しみが伴う。自らの文化的な文脈とは、自らの個人史のなかに埋め込まれているものであるからである。北原が、これまでの人生において創出してきた自らの文化と学びの方法を否定され続けた苦しさを、教師としての専門的成長を高めるエネルギーに変えることができたのは、次の二つの出会いがきっかけであった。まず一つ目の教師との出会いについてみていこう。

「大きく変わったことのいくつか、ターニングポイントがあったとしたら、夏休みに〈中略〉全道の倫理の大会を青島でやったのですよ。そのときに出会ったのが重松さん<sup>38)</sup>で、重松さんの発表を聞いて、もうショックを受けましたね。やっぱり、彼も非常に荒れた学校なんだけれども、そこできちっと倫理の研究をやって、授業をやっているのですよ。宗教地理が専門なので、自分の足で琵琶湖から越前にかけての宗教を踏破して、宗教性の、要するに、浄土真宗か曹洞宗かの違いで、どんな地域的な変化があるのかを自分で足で調べた研究発表をされて、感動しましたねえ。それ以来の付き合いなんです。だから、今21年目なんです。だから、やっぱり教えてもらったのが、やっぱり力じゃなくて、授業なんだなあ。やっぱり授業がうまくいかないのは、やっぱり僕の授業がダメなんだと。生徒のせいにしたんじゃダメなんだと。」<sup>39)</sup>

のちに同僚となる一人の教師との出会いが、授業を支える学び、研究の大切さを北原に教えることになった。ここから自分の授業を創ることに向けて、北原は地道に歩みを重ねることになる。そしてこの教師との出会いは、のちに北原の教職生活を支える重要な研究共同体となるソクラテスの会の結成につながっていく。そして、転換をもたらしたもう一つの契機は、ある生徒との出会いであり、その生徒の声であった。

「2学期に入って、ある女子生徒に言われたんですよね。『先生っていうのは、どうせ私が努力しても結果でみんな判断するんでしょう、結果で決めるんでしょう。途中でどんなに努力したって、私だって努力しているんだけど、全然わからない』って言うんですよ。僕の授業、『何言っているのか全然わからない』って言うんですよ。『一生懸命聞いているんだけど、全然わからない』って言うんですよ。だから、『そういうのって、点数なんかにならないんでしょう』って。『どうせ私は落とされるんでしょう』みたいなことを言われて、やっぱりショックでしたよね。」<sup>40)</sup>

この女子生徒との出会いをきっかけとして、北原は、社会科の二人の同僚とともに評価の

研究に着手した。北原が選んだ研究のテーマは、到達度評価と形成的評価であった。マスタリー・ラーニング、すなわち子どもたちの完全習得学習を目指して、学びの過程を細かく評価するという方法を学び、教育実践にも取り入れたのである。そして、この方法を取り入れることにより、授業における生徒たちの反応も「ガラリと変わった」<sup>41)</sup>という。

こうして1年目の秋から北原は生徒の日常の学びを組織することで、暗記とテストという学びの構造を組み替え始めた。そして、2年目にはビデオデッキを購入し、映像や音楽教材を授業に取り入れ始める。音楽はこれを通して人生を、そして英語を学んできたというように、北原にとってなくてはならないものであり、この音楽を授業に取り入れることにより、その授業はより自分らしさを出せるものになった。

こうして生徒たちも「[北原の授業は]ほんとうに変わったと」<sup>42)</sup>認めるようになり、これまでよりも積極的に授業に参加するようになった。しかしながら、ここで開発した形成的評価の方法については、のちに研究共同体の仲間から批判を受けることになった。

「野々村さん<sup>43)</sup>はすごく批判的なんです。危険だって。要するに、今の態度と評価、態度の問題ですよ。〈中略〉やっぱり彼は鋭く見抜いていて、先生によく思われるような子たちは、関心態度点で誘導できてしまうという問題点をすごく指摘されて。」<sup>44)</sup>

このステージでは、北原の授業は、あらかじめ教育目標があり、そこに向けてあらかじめ準備されているカリキュラムの枠のなかにあった。その上で、そのカリキュラムが想定する学びの軌跡にいかにかスムーズに生徒たちを誘<sup>いざな</sup>っていくのかに教育方法上の工夫は向けられていた。こうした授業の限界を指摘してくれたのは、研究共同体の仲間たちであり、忌憚なく批判し合える仲間たちの存在が、北原をさらなる成長へと導くことになった。

ともあれ、授業においては一つの窮地を逃れて、リアリティ・ショックを乗り越え、早期にバーン・アウトすることなく、教師として生き残ることに成功したわけだが、一難去ってまた一難というべきか、今度は生徒とのトラブルという問題に直面することになった。

「ただ、その頃は個人的には非常につらい時期で、バレー部の顧問になったんですけど、喫煙事故の処理を巡って、生徒から不信感を買ってしまって、対教師暴力の標的にされてしまって、2年目は。2年目はほんとうに、自分でも自分の力のなさというか、教科の面白さと部活動での自分の挫折感と。」<sup>45)</sup>

高校教師の仕事は、授業だけにとどまらない。生活指導や部活指導など、さまざまな仕事の不慣れな新任教師に襲いかかってくる。さらに、北原が教職に就いた1980年代前半は、全国的に学校が荒れた時期でもあった。生徒から暴力を受け続けた教師が身を守るために生

徒を刺してしまったというような事件も報道されていた<sup>46)</sup>。この時代は、生徒にとって教師への暴力に対するハードルが低くなっている時代だったといえることができるだろう。そのような歴史的、社会的文脈のなかで、北原もまた、生徒たちの暴力という問題に巻き込まれることになった。

「暴力を受けたのは、自習監督のときに、自習の監督に行ったときにマンガを読んでいる生徒がいて、バレー部の生徒なんですよ。僕を無視するようにマンガを読んでいると。で、マンガを読むのをやめるようにいっても、平然とやめないって。だから、マンガを取り上げようとしたんですよ。したら、その僕が自習に行った授業というのは、実は授業中にマンガ読んでも注意していなかったらしいんですよ。そしたら、教科担も注意しないことをなんで自習のおまえがえらそうにやるんだ、と。それでこう、僕もまあ余裕のない状態だし、日頃からもうすでにうまくいってなかったんで、それを適当に流すことができなくて、強行的に取り上げようとしたら、ほかのもう一人のバレー部が同じクラスにいて、食ってかかって、掴みかかってきて、で、加勢が隣のクラスから来て、モノをぶつけられて、まあコップですけどね。何個かぶつけられて、やり合っているうちに背広は破られて。で、その晩、その子のうちに謝罪に行かされました。」<sup>47)</sup>

教師が生徒に暴力を受けた上に、生徒の自宅に謝罪に行かされるという衝撃的な事件であったが、今回は教職を辞めようとは思わなかったという。部活の指導のつまずき、学校の雰囲気悪さがあっても、授業での生徒たちの心を掴みつつあったからである。北原にとって、授業こそが教職アイデンティティの中心に位置づくものだったのである。

そして、北原は、自分自身が教師として遭遇した校内暴力という「教育問題」について、次のように振り返っている。

「自分たちのほんとうの、80年代に校内暴力が世の中に問いかけたものを、こうなんかすり替えてしまっていたのではないか。それがね、僕なんかは、90年代にバブルがはじけて表面化していったと。いろんなものが表面化して行って、とくに90年代、95年[97年]ですよ、酒鬼薔薇という事件のときに、世の中に、殺すことがなぜいけないんだというところまで子どもに突きつけられてはじめてね」<sup>48)</sup>

1980年前後の校内暴力という問題は、子どもたちからの学校教育への異議申し立てであり、この問題に正面から向き合えなかったことが、1990年代のさまざまな問題につながった。これが高校の現場から子どもたちと学校を見続けてきた北原の1980年代、1990年代についての時代認識である。

生徒から暴力を受けた上に生徒の自宅に謝罪に行かされたという、まさに校内暴力という問題の究極の被害者である北原自身が、この問題を上記のようにとらえているという点に重みがある。すなわち、北原は、校内暴力の被害者でありながら、校内暴力という問題を封じ込めるべき問題ととらえているのではなく、その問題の深層にはもっと深い根っこがあると考えている。そして、1980年代、1990年代の学校教育の課題は、この根っこに向き合うことであつたはずだと考えているのである。こののちの北原の教職生活は、静かに「教育問題」の深層を探りながら、教育実践の次元でそこに働きかける方法を模索するというかたちで経験されている。

(ステージ5) 青島高校(二) ― 教職アイデンティティの確立 ―

辞めることばかり考えていたはじめの半年、そして、問題の渦中にあつた2年目と波瀾万丈の教職生活の滑り出しだったが、3年目、一人の同僚が異動によって加わつたことで、学校の環境は一変した。一人の教師の創意工夫によって、これまでの教師同士、教師生徒、生徒同士の関係が組み替えられ、行事を通して学校に一体感が生み出された。3年目は、北原の現在までの教職生活の中でもっとも幸せな1年間となつた。

「実は、一人の先生の転勤がもう大きな引き金だったんですよ。木村純治という先生が、十勝東商業から来たんですね。で、僕の学年の学年主任になって、その先生の下で僕は普通科の担任になつたんですよ。ところがこの先生、発想がもう全然違うんですね。ほかのすべての先生と違うんです。もう自由で。いきなり、学校間の、普通科と商業科の劣等感を消してしまつたんですよ<sup>49)</sup>。来て数日ですね。ホームルームをバラバラにしたんですよ。つまり、今日は僕が1組の担任だけれども、明日は2組の担任でホームルームをやっていると。入れ替えてミックスホームルームなんです。先生が入れ替わるんです・・・そして、学年通信を持ち回りで出すんですよ。1組の担任書いたら、次2組の担任、3組の担任、1組の副担任、2組の副と。そして、ホームルームをときどき混ぜちゃうんですよ。〈中略〉宿泊研修のときは感動しましたね。映画館貸し切れ、北原さん、と。〈中略〉子どもたちは生まれてはじめて映画館で映画を観たんですね。『ネバーエンディング・ストーリー』という映画だったんですけど、みんな泣いて(中略)行事で楽しいから、悪いことをしたいという気持ちがなくなっちゃうんですよ、子どもたちが。』<sup>50)</sup>

学校はこれまでとは一変してしまつたのである。

「あんな長く続いた校内暴力が、わずか何日ですかね、あの先生が来てから。その学年は全く起きませんでした、3年間。教師を殴るなんてことはいっぺんもありませんでした

ね。その代わりに、管理職とはつねにたたかいでしたけど。前例がないという人には、もう信じられないことが次々次々企画されるので。で、学年執行部を作っちゃって。今なら、三者協議とかありますけど、その19年前ですよ、ホームルーム長、副ルーム長と担任団の先生方で、次の行事どうするって。全く同じ視線で、おまえら何やりたいって。じゃあ、スポーツ大会組もうと。学年でみんなでレクリエーションやろう。学年で青島の山を登ろう、とか。勉強で進級できない子たちを学年でよし勉強会で夜やろう、と。すべてそれで。修学旅行も徹底してそれで。門限なし。4人ずつ25の宿に泊まらせて。妻籠ですよ、馬籠と。同宿して、おじいちゃんと夜明けまでしゃべってもいいと。その代わりに、帰ってくるまでに俳句を詠むこととか、そういうルールで。で、学年農園作って、お母さん、お父さんも行事に巻き込んで。」<sup>51)</sup>

問題としての校内暴力は、これまでとは全く反対の方法によって、解消されていった。さまざまな活動を禁止するのではなく、さまざまな活動を企画することにより、生徒たちのエネルギーに水路を準備したのである。

ここで行われた山村のお年寄りと門限、就寝時間なしに語り合うという企画は、非日常の修学旅行で眠りたくないという生徒たちの欲求を生かしつつ、その欲求を世代間伝承の機会、さらには生徒たちが日常的にさらされている商業文化、消費文化とは別の回路で大人の文化に出会う機会を準備している。このとき、生徒のエネルギーは、これまで出会ったことのない他者に対する理解、そして他者と出会ったことによる自己の認識の再構築に向かい、教師のエネルギーは、子どもたちの学び、育ちを生み出す場をどのようにして準備するかという本来の専門性に向かう。

1980年代の半ば、北原はこのような経験を重ねていた。学校という枠を超えた出会いのある教育実践を通して、生徒たちが変わっていく姿を目の当たりにした北原が、こののち、管理教育という方法を身体的に受けつけなかったのは、当然のことだろう。

「この3年目というのは今でも1番の年ですね。すべて企画したことは実現できるって自信というのか。そして、子どもたちがそれを支持する。支持してくれる。子どもたちが支持をして、管理職とたたかって負けても、なんにも悔しくないんですよ。その悔しいエネルギーを次の行事にぶつければいいわけだから。そうやって学校は変わっていきましたね。」<sup>52)</sup>

この1年間は、北原が、尊敬できる先輩の教師と出会い、その教育実践の確かさを身をもって実感するとともに、自らの心に教職生活の喜びと教師としての自信、さらには教育の可能性に対する信頼を植えた1年間であった。

(ステージ6) 日高東高校 ― 「旅」と授業づくり ―

教職3年目に教師の仕事の醍醐味を味わった北原だったが、この年度末、異動が待ち受けていた。しかも、次は日高支庁の日高東高校であった。襟裳岬のほど近く北海道の菱形の南の端に位置する日高東町までは、青島島の対岸の市から車で約500km、所要時間は現在の高速道路を使っても約8時間である。二つの地域は全く別の世界であった。

一緒に行事に取り組んだ同僚の木村には泣かれたという。生徒たちとの別れもつらいものであった。青島高校での最後の年は、1年生の担任だったので、生徒たちは北原が3年生まで担当するものと信じていたという。普通科1クラスの単級だったこともあり、人間関係も濃密だったのである。さらに、この年は、北原にとってもはじめての担任であり、北原からしても受けもった生徒たちへの思い入れも深かった。しかも、500kmという距離は頻繁に会える距離ではない。北原は「あのときはほんとうに生徒を裏切ったという気持ちが強くて」<sup>53)</sup>、すなわち、自責と寂しさの入り混じった感情を抱えて、2校目の日高東高校に旅立つことになった。

しかしながら、凝縮された1年間とそのあとの別離は、生徒にとっても美しい思い出を結晶化させる働きをもったのかもしれない。青島高校の3年目の生徒たちと北原の間には、現在もなお交流が続いているという。

さて、未知の世界であった日高東高校は、普通科6クラス、工業科2クラスの大規模校であった。そして、日本社会がバブル景気に突入する直前の1986年、この学校もまた荒れていたという。しかしながら、同僚の教師たちは教育へのモチベーションも高く、ここでの7年間は、北原にとって「勉強」の7年間だった。そして、周りの教師たちに触発されながら、北原は新しい試みを始めることになる。それは教科通信の発行であった。

「たしかに成績的にはひじょうに厳しい子たちがいっぱいいたんですけど、授業がここはすごくよかったですよ。教科通信を書き始めたのは、日高東高校がスタートなんですよ。現代社会で1年目。」<sup>54)</sup>

「もともと漫画家になりたかったので、絵を使って、そして教科通信をやってみようと考えたのは、まずは担任がなかったことと、持ちクラス数が多かったんですよ。政経を6クラスすべてと、現代社会1クラスで7クラスもちましたんで、だから、新聞作りということで子どもとの接点をもち、ということで。それがものすごく受けたんですね、生徒に。非常に。」<sup>55)</sup>

1年間、教科通信を出し続け、この時から教科通信という媒体を通して、授業を展開する

という北原の授業スタイルが創られることになった。

「子どもたちがものすごく反応がよくて、返してくれるので、それに応えるうちに授業になっちゃうんですよ。」<sup>56)</sup>

ここで、教師と子どもたちとの対話を通して学びが創られるという授業のスタイルが生まれている。あらかじめ学習目標があり、そこに向けてあらかじめ準備されているカリキュラムをなぞるのではなく、対話を通して、学習目標自体が発展しながら、振り返ったときにカリキュラムが生まれているという学びの構造が見られる。北原の授業が新たな地平に到達したことがうかがえる。

この学校には、教科を超えた教師たちのつながりがあった。授業の創造、学びを通しての同僚性である。そして、教師の協働によって生み出された授業に対する生徒の積極的な反応もあった。このような状況下であるならば、学校の荒れという問題も決して乗り越えられないものではない。教育実践の交流と創造を軸とした同僚性の構築、地域の人々との連帯、こうした他者とのつながりが、北原の日高東高校での7年間を支えていた。

「周りの教員たちがみんな、僕の授業を学んでくれるんですよ。で、学習会で、何が楽しい授業なんだろうという学び合いを、教員70人近くいるんですが、平均年齢が31とかなんですよ。だから、大部分が20代なんで。日高東の7年はほんとうに恵まれた7年でしたね。そして、映画サークルというのを夜やっていて、週二日しかやらない映画館で五日間クリーニング屋をやって、その赤字を埋めているおじさんがいるんですよ。それを支える会が高校の中にあって、15人もメンバーいて、僕もメンバーに入って、それで夜、次は何、映画館でかけるって。で、ニューシネマパラダイスという映画の世界なんですよ。で、その夜、地域の人と語り合えるでしょう。そのメンバーには銀行員もいれば、保健所の人もいれば、そういう人がね、地域の問題を教えてくれるんです。」<sup>57)</sup>

さらに、北原は日高東高校時代に教職員組合に加入する。組合活動を通して、さまざまな社会的な問題と出会い、そこから学びを深めていくことになる。

「一番力になったのは、職場新聞を書いたんです、ずっと。何年書いたでしょう、3年から4年書いていましたね。だから、ずいぶん勉強しました。法律、労働関係の本とか。職場の人権、とくに職場の人事に関する問題とか。」<sup>58)</sup>

そして、校内暴力という「教育問題」に1980年代前半を過ごした青島で出会ったように、

1980年代後半から1990年代前半を過ごした日高東では不登校という新たな「教育問題」と出会う。北原の教職生活もまた大きな時代の流れと共振していたのである。

「2回目の担任になりますかねえ、最初の年に不登校の子を抱えたんですよ。〈中略〉今だからこそ不登校というのは認知されていますけど、当時は担任もったのが88年なんですけど、どうして、どうアプローチしていいかわからない。心療内科というのがどういふことをやっているのかよくわからない。そうしているうちに彼が家出をして、そして彼は病院にやられて、そして精神病院に行っているという、親御さんがやっぱり非常にコンプレックスをもって、その子を手放してしまうんですよ、親戚に預けてしまって、遠いところに行ってしまう。で、その子にかかわっているうちにクラスがバラバラになっていくのを気がつかなかったんです。で、修復できなかつたんです、その1年。」<sup>59)</sup>

こうした難しさに出会うなかで、教科通信と併せて、学級通信を書くことで、自分自身を見つめるとともに、生徒たちとのコミュニケーションを回復しようと努めたのである。

「学級通信を日刊で3年間書き続けたのはその頃なんですね。だから、自分の限界とか、それから自分の問題意識を振り返ることは学級通信でかなりできて、その後すごくいろいろと考える材料ができましたね。担任をもって日刊でずっとやったわけですから。」<sup>60)</sup>

この時期、教室や学校のなかでは、クラスの生徒とのコミュニケーションの難しさのほか、教職員組合をめぐっての同僚教師との対立といった人間関係の問題にも直面していた。にもかかわらず、さらなる教師としての専門的成長に向かうことができたのは、少年時代から親しんでいた旅を通じた世界の広がりによるものであった。

「この頃、一番大きいのは、自分自身が世界と出会ったということでしょうね。取材旅行を開始したのが日高東高校で。〈中略〉同じ学校の先生の、美術の先生の薦めで、海外旅行をしてみたいと思い始めて、最初に行ったのがやっぱり、それならと思って、大学時代に読み親しんだ、ギリシャとルソーのフランスを選んだんですね。〈中略〉スリランカからの出稼ぎの男女のカップルと語り合ったりとか。そういう中で、異文化ということを強烈に感じて、で、自分の身体を通じた言葉で教科通信を書いてみようと思って、ジャーナルニュースというかたちで、生徒に、それを、ギリシャの報告を書いたら、すごく受けたんですよ。それは日高東の1年目の冬ですね。」<sup>61)</sup>

1985年のプラザ合意のあと、1ドル230円～270円で推移していた為替レートが1987年



1月には1ドル120円台に達する。円の対ドル価値が2年間で2倍になったのである。これに伴い、海外旅行ブームが始まる。1984年に466万人だった日本人出国者数は、1987年には683万人となり、1990年には1100万人に達している。

こうした時代背景の下、教師の海外旅行、海外取材も身近なものとなったのである。円高の下での好況は、とりわけ、美術、音楽、社会科といった教科の教師たちに、世界の絵画、彫刻、音楽、建築と出会う機会を提供していた。

さらに、1988年の夏、今度は北原は自転車で西日本への旅に出た。その動機について次のように語っている。

「僕自身は、社会科教師としてのすごいコンプレックスがあって〈中略〉戦争を経験していない者が、戦争をどう結論づけていいのか、授業で、こんなに悲惨だって言っぱなしでいいのか。なんかこう活動まで、行動に移させるまでできるのだろうかとか。それはすごくつらかった時期でしたね。やればやるほど嘘っぽいですよ、自分の授業が。〈中略〉僕なりのアプローチとしては、やっぱり自分で その場所に立ってみないとわからないと思って」<sup>62)</sup>

「広島から長崎を自転車で走って見たんですよ。身体を通してみたいと。距離感も含めて。暑さも含めて。〈中略〉大学時代の友だちのなじみのお好み焼き屋さんに行ったときに〈中略〉実は私も被爆者なんだと、作りながら、被爆体験を語ってくれたんです。それを聞いて、メモしながら終わったときに、ふと思ったのが、このおばあちゃんが亡くなったら、この事実は消えてしまう。これはもう是非伝えなければならないなど。

それで、僕はすごく光を与えられたのは、語り部授業というコンセプトなんです。その人たちは教えることが仕事じゃないけれども、確実にその生き様は人を教えられるものをもっていると思うんです。それは教師の語る言葉よりはるかに重いし、はるかに確かなものだと思ったんですね。だから、旅を通じて、その人たちの思いや体験を文字にして、子どもたちに伝える、教科通信として残す。それが子どもたちに、きっと語り続けるんじゃないかなあという。それが僕の語り部授業なんです。それが僕の旅のスタイルの始まりなんです。そうすることで時代が伝わっていくんじゃないかなと。」<sup>63)</sup>

取材旅行を通して、人々の声を聞き取り、生徒たちに伝えていく。こうした「語り部授業」が北原の授業のスタイルとなった。このスタイルを確立することで、北原は自らの教師としての存在証明を得たのであった<sup>64)</sup>。そして、7年間の日高東高校での「勉強」のあと、新たな場所で教師としての歩みを重ねることになる。

(ステージ7) 函館南高校 ― 授業の熟達 ―

教師の生活は、教職生活だけではない。教師もまた一人の人間であり、同時に個人としての生活、家庭生活を生きながら、教職生活を営んでいる。多くの場合、家庭生活は、中年期に向かうなかで重みを増してくる。北原の人生もまた、教師という仕事に全身全霊をかけて打ち込むことができた時期を過ぎ、家庭生活への配慮が求められる時期に差ししかろうとしていた。教師の仕事は、子どものケアという再生産に関わる仕事である。家庭をもつ教師は社会的な再生産に関わる専門職であると同時に、出産、育児、介護という個人的な再生産も担わなくてはならない。この二つの再生産のバランスを上手にとるのは難しいことである。

さて、中学校時代に北原をトラックの助手席に乗せてくれた父は、1981年に事故で瀕死の重傷を負い、10年間入退院を繰り返していた。そして、1991年の秋、事故の後遺症から脳血栓で倒れたのである。北原は、毎週土曜日、年休を半日とって、道東の実家に帰り、母親に代わって父親の付き添いをしていたのである。北原は、父の介護のために、道東の高校への異動を希望する。ところが、一度はほぼ内定した道東への異動が、急遽、潰れてしまう。北原は厳しい状況に追い込まれたが、幸い父親の容態が安定したので、1993年再び異動の希望を出し、函館南高校に赴任することとなった。そして、函館南高校に赴任したとき、北原は北欧旅行で知り合った女性と結婚している。これまでの教職生活に家庭生活の輪が加わったのである。

日高東高校から北海道のほぼ最南端に位置する函館市までは海岸線に沿って400km弱の道のりである。現在的高速道路を使用しても約6時間を要する。実家の道東地方からは大きく離れることになった。2回目の異動もまた大移動を伴うものであったのである。

ここで北海道の高校教師の人事システムについて言及しておきたい。これまでの叙述でも明らかなように、北海道は全道人事である。広大な面積の北海道全土が異動の対象となり、離島、僻地には希望者が少ない。そのため、離島や僻地の高校には新任教師や経験年数の浅い教師が配属されることが多い。青島高校では、北原の社会科の同僚のうち、主任が27歳で、もう一人が24歳だったし、日高東高校では、70人ほどいた教師の平均年齢は30代前半ぐらいではなかったかと、北原は述懐している。

それでは、希望者の多い地域はどこだろうか。まず北海道庁の所在地であり、道随一の大都市である札幌が挙げられる。それから函館もまた希望者が多いところであった。北原によると、暖かくて気候がよく、文化都市で、市内の高校がすべて進学校であることが函館の人気の理由だという。札幌や函館といった人気のある地域に配属された教師たちは、子どもの教育というような問題もあって、多くの場合、もはやそこから出ることを希望しない。こういうわけで都市部では教師の高齢化が進む。北原が赴任したとき、函館南高校の教師の平均年齢は50代に差しかかりつつあったのではないかと、北原は述懐している。前任校の日高東高校とは教師の年齢構成が大きく異なっていた。このように、北海道の全道人事のシステ

ムは、地域、学校間に教師の年齢構成の差異を生み出していた。

ところで、これまで離島や町村部で教職経験を積んできた北原は、はじめ函館南高校の生徒たちの反応にとまどったという。そして、生徒たちが求める授業もまた違っていた。

「やっぱり都会の子ですよ、冷ややかかっていうか。〈中略〉[授業も今までの授業よりかつて高校時代に自分が受けていた授業に近く]、まさにそれを研ぎ澄まさなくてはならない。非常に情報量の多い、それから非常にスピーディーな」<sup>65)</sup>

北原はまた新しい授業のスタイルを模索しなくてはならなかった。そして、今度は先輩の教師たちから学びながら、教材研究を掘り下げることに力を入れ始める。この学校には、社会科の同僚教師たちが休み時間には教材研究にいそんでいるという職場環境があった。はじめての科目である世界史を担当することになった北原は、先輩の教師たちの工夫したプリントづくりに学びながら、音楽や資料、それに教科通信である世界史新聞を使った自分なりの教育方法を創り上げていった。

北原は、一校目の青島高校では日本史と地理と倫理を担当し、二校目の日高東高校で現代社会と政治経済を担当、そして三校目の函館南高校で世界史を担当したことで、社会科のすべての科目を経験することになった。こうして教職12年目にして、教科内容についての理解と経験に裏打ちされた自信を身につけたのである。

ところが、函館南高校での勤務はわずか2年間で終わり、再び次の異動が待っていた。この異動は、家庭生活の事情によってもたらされたものであった。

「[妻が] 北海道になじめなかったんですよ。まず北海道のコミュニケーションというのがわからなくて、溶け込めないと。自分が無視されているようだ。それから、それまで出版社で勤めていたんですけど、仕事がないんですよ、函館では。で、やっぱりノイローゼみたいになったりして。僕ともうまくいかない時期が続いて」<sup>66)</sup>

もはや函館では家庭生活を続けるのが難しいと考えた北原は、札幌に転出することを決意する。札幌ならば、妻の仕事も見つかるのではないかという希望があったからである。この頃、少子化の波が北海道にも押し寄せていた。函館南高校も1クラス減のため、過員が出るというタイミングの良さもあって、すんなりと札幌への異動が決まったのである。

北原もまた、北海道の多くの教師たちと同じように、離島、町村部、地方都市を経験したのち、札幌へと吸い寄せられていったのである。

(ステージ8) 札幌向陽高校 ― 「管理教育」の下で～

日本社会が阪神大震災と地下鉄サリン事件に震撼した直後の1995年4月、北原は札幌向陽高校に赴任する。札幌向陽高校は、札幌市内とはいっても、かなり都心から離れた郊外にある学校だった。そして、これまでの三校とは、学校を取り巻く状況が幾分違っていた。青島高校は島で唯一の高校であった。そして、日高東高校もまた町で一つの高校であった。荒れているとはいっても、どちらも地域の学校であった。さらに、函館南高校は地方都市の進学校であった。これらの三校は、いずれも地域に根ざした学校であった。ところが、札幌向陽高校は、1980年代に新設された高校で、地域に根ざした学校とはいえなかった。偏差値によって輪切りにされる中学生たちのある層が通う普通科の高校であった。

地域に根ざしていない、有名な進学校でもない、なすべきことが明確な職業学校でもない高校というのは、何か安心感のない、よるべない不安を抱えているものである。地域に根ざしているならば、どんなに荒れていても、いざというときには、地域の人々は「オラガムラ」の高校として、支えてくれるだろう。有名な進学校であるならば、名門という安心感の下に生徒たちは集まり、親たちは学校を信頼し、教師たちは一つの目標の下にまとまることができるだろう。職業科の高校であるならば、教師たちは、生徒たちに専門的な技能を取得させ、社会に送り出すという一つの合意の下で教育活動を営むことができるだろう。現実には、こうした学校であっても、学校は個別に難しい課題を抱えている。しかしながら、これらの学校には、最低でも一つの拠り所は存在している。これに対して、それ自体としては拠り所をもたない大都市郊外の新設校は、何とかして拠り所をこしらえなくてはならないという強迫観念につきまといわれる。こうして、しばしば進学実績やスポーツ実績などの目に見える拠り所を求めることになる。そして、どちらも難しい場合、生徒の外見、態度に最後の拠り所が求められる。札幌向陽高校の拠り所もまた「望ましい」生徒の外見、態度を生み出す厳しい生徒指導にあった。この学校に赴任した北原は、これまでの三校では経験したことのない息苦しさを感ずることとなる。

「札幌に転勤したときに、やっぱり札幌の学校は異様だと思ったんです。これは僕が潰されるか、学校の雰囲気を変えていくか、どっちかしかないなど。学校の中では生徒はもうほんとうに、向陽高校の別名、向陽監獄っていうんです。監獄なんですよ。ほんとうに生徒にとってみれば息苦しい。全校集会では常に教員の生徒を威嚇するような怒鳴り声ばかりで、制服検査。」<sup>67)</sup>

ここで北原が直面したのは、まさに管理教育という「教育問題」であった。この「教育問題」の一番の問題は、管理そのものにあるというよりもむしろ、管理教育というシステムが教師たちを規則によって機械的に管理する者たちと生徒の人権を擁護する者たちに分断するところにあった。そして、この対立は、どちらの側にも生徒が今現在直面している課題、生

徒がその中で生きていかななくてはならない社会的文脈に対する省察から遠ざかるように働きかけ、教師の専門的成長を妨げていた。

「つまり、歯車にされてしまう。このまま行くと、管理教育を僕が請け負わされて、生徒を管理する立場になってしまう。そのとき担任になったので、また。でも、そういうことを、たとえば、管理主義教育をやらなければいけない自分だけ、それをさせられることを生徒と語り合えるというか。ほんとうに工場のような学校でしたから。」<sup>68)</sup>

上記の語りは、青島高校、日高東高校、函館南高校についての語りのような、現場で格闘した人間しか叙述できない具体的で、ジレンマに満ちた、それでいて生き生きとした語りではない。マスコミで語られる「教育問題」をなぞったような語りである。新しい学校で、北原は、これまでの教職生活とは全く異質な経験をしていた。

ところで、この時期、北原はいわゆる管理教育の下でこれまで形成してきた教職アイデンティティが危機に晒されていた一方で、家庭生活においても大きな危機に直面していた。札幌に転居したあと、一旦、妻の調子は持ち直したのだが、根本的な解決には至らず、札幌向陽高校の3年目の冬にとうとう別居することになったのである。妻の実家の近く、横浜市に家を借りて、北原は毎月、札幌と横浜を往復する生活となった。

職場と家庭の二つの危機を抱えながら、教職生活を続けた札幌向陽高校での4年間、北原を支えたのは、学校外での人々との出会いであった。

「[札幌向陽高校の]最初の年ですよ、菅沼さんに会ったのが。カンボジアに行って。これだと思ったのが。僕はここだなんて。〈中略〉[学校のなかに閉ざされていたら]僕は潰されてしまうけど、外とつながることによって、僕はまた違った道を展開するんじゃないだろうかと。菅沼さんとつながって生徒とつながることで、僕を通じて生徒が世界とつながれるという。」<sup>69)</sup>

カンボジアでNPO活動をしている菅沼茂と出会い、ボランティア・クラブを立ち上げたのである。学校の中での専門的成長の道を閉ざされた北原は、世界とのつながりに活路を求めたのであった。同時に、もはや教職には希望を見出せなくなり、国際協力の仕事に転職することも真剣に考えたこともあったという。イギリスにおける教師のライフヒストリーの研究者であるグッドソンも、教師の仕事の脱専門職化、公共的使命の衰退に伴って、教師たちが教職に失望し、ほかの活動、ボランティアなどについて語る時、より生き生きとしている事態について論じている<sup>70)</sup>。そして、転職した教師の多くは、転職前よりも給与の低い仕事に就いているという。すなわち、これらの教師たちは、金銭的報酬よりも使命感、やり

がいといった精神的報酬を求めて、教職を去っているのである。本来、よりよい明日の社会を築くという使命感なしには成立しえない教職が、学校教育の硬直化がもたらしている精神的報酬の欠如のため、使命感をもつスタッフを失っているとしたら、これはもはや教職の危機にとどまらず、現代社会の危機であるともいえるだろう。

さて、それでも、北原に退職を踏みとどまらせ、教職を続けさせたのは、旅という回路を通しての人とのつながり、とりわけ生徒、同僚の教師、研究会の仲間との心の通う関係の構築であった。

「菅沼さんは初対面なのに、ほんとうに大らかに受け入れて下さって、話を聞かせていただいて、子どもたちと合わせていただいて、ところがその、本棚に本がないんですよ。見事に立派な図書館を自分で作ったのに、本が足りないよ。本を日本で送っても、半分ぐらいカンボジアで盗まれるよ。郵便局員に。届かないんだと。送っても送っても。という話をしたら、生徒が読んだ本でいいんだと、送りますよ。みんなで送りますよ。生徒に突き動かされて、どうやって送ったらいいだろうと。そして、郵便局の人が親切に調べてくれて、送料から。一番安い方法を調べてくれて。それから、同僚の松村という、これもナマステ<sup>71)</sup>のメンバーに今なっているんですが、『お金、先生、北原さん、出すよ、2人でやろう』と言う。そういう人がいてくれて。ええ。そういった社会科の友だちとか、同僚のなかで心ある人とか、それから生徒たちが盛り上げてくれていましたよね。』<sup>72)</sup>

ここに北原の中学時代の経験と同型の構造をみることができる。苦境に遭遇した時、ただひたすらにそのなかでもがくのではなく、旅を通して自分の世界を拡げ、そのことによって自分が置かれている状況を相対化する。こうして、北原は、苦境を生き抜いていった。そして、旅に出ても最後は生徒との対話を通して学び育つという地点に帰ってきた。生徒から学ぶ、生徒とともに育つという教職アイデンティティの軸があったからこそ、北原は教職を続けることができたのであろう。

さて、1995年に北原が札幌に赴任したとき、かつての同僚や研修仲間であった3人の教師が同時に札幌赴任となった。あるいはこのことは教師たちが年齢を重ねると札幌に向かうという北海道の教師人事の特殊性が招いたことだったのかもしれない。ほぼ同年代であり、同じように高校をより生き生きとした学びと育ちの場にしたいという問題意識をもっていたこれらの3人に北原を加えた4人<sup>73)</sup>が設立の中心となって、倫理の研究会であるソクラテス<sup>74)</sup>の会が発足する。この会は、その名の通り、ギリシャの哲学者ソクラテスに倣って、虚飾を捨て、学びの原点に帰ろうという研究会であった。現在、研究会は会員二十数名を数え、教育実践とその実践を生み出した教師自身の経験をナラティブの形式で報告し、交流する場所となっている。

人々との出会いと、研修、研究会を通じた先達、同僚の教師たちの教育実践からの学び、これが北原を育ててきた。そして、教職生活で一番苦しかった時期を支えたのも、こうした信頼できる他者とのつながりと彼らの支えであった。

「向陽のときは、私生活では非常に苦しい。ただ、札幌には先程お話ししたソクラテスの仲間がいましたので、僕自身は、重松さんや野々村さんや。ですから、そういう方々に僕は支えられましたね。」<sup>75)</sup>

さて、1998年、札幌向陽高校の4年目、引き続き札幌と横浜の二重生活を続けていた。この前年の1997年には、はじめての子どもが誕生していた。さんざん悩んだ末、北原は、家庭生活を第一に考えて、故郷の北海道を離れることを決意し、関東地方の教員採用試験を再受験する。38歳での高校・社会科での再受験は厳しいものがあったが、これまで培ってきた教育実践を支えとして、見事、難関を突破し、関東地方の公立高校の教師として、第二の教職生活を踏み出すことになる。

(ステージ9) 希望ヶ丘高校(一) ―さらなる格闘と沖縄修学旅行―

北海道を離れて、関東にやってきた北原が、はじめに赴任したのはF県北部の安岡市にある希望ヶ丘高校であった。希望ヶ丘高校は、1970年代に設立された新設校で、2008年3月に最後の卒業生を出して、総合学科制の安岡羽衣高校に継承されるかたちで、その短い歴史を終えている。北原にとって、第二の教職生活のスタートはカルチャー・ショックの連続であった。

「向陽からさらに希望ヶ丘に来て、すごく中退する子の多い学校に驚いて。向陽は1学年400人いたんですね。40かける10クラスなんですよ。その、中退する子というのは、年に、そうですね、学年に400人いるうち、1人、2人。また、重大な問題を起こして辞める子が数人いるから、10人以内なのに。希望ヶ丘の場合は、1学年で20人とかでしょう。〈中略〉1学年200人です。200人で1割でしょう。全国平均が2%なのに、希望ヶ丘は10%でしょう。全国平均の5倍もあるのです。」<sup>76)</sup>

希望ヶ丘高校は、その存立自体が厳しい状況にある学校であった。1999年時点で人口が3万人台の安岡市に、普通科の安岡高校、工業科の安岡工業高校、それに希望ヶ丘高校の三つの公立高校が存在していた。安岡市だけで生徒数を確保できるはずもなく、希望ヶ丘高校は近隣地域の受け皿となっており、不本意入学の生徒も多かったという。

「ひじょうに不本意入学が多い学校で、全部普通科なんですよ。で、普通科のなかも一クラスだけが進学、あと四クラスが就職、そうなるそうですね、重視されるのが、学力よりもやっぱりその、真面目さ、挨拶、あと部活動、行事ですよ。だから、その真面目さとか、挨拶とか、ある意味では、従順さが強制されてしまうような雰囲気がある。」<sup>77)</sup>

学びではなく、規律が重んじられる学校、こうした学校で働くことは、北原にとって、耐え難いことであった。教職生活の危機から逃れるために関東に移ってきたのだが、新しい学校もまた、北原の教職アイデンティティが危機に晒される場所であった。

「どっちも、私のあの9年は、ほんとに、一番しんどかったなあと思いますね。」<sup>78)</sup>

北原はこのように向陽高校の4年間、希望ヶ丘高校の5年間を振り返る。ただ、苦しきのなかにあっても、北原のなかにあった学びや授業への情熱は失われることはなかった。赴任して2年目の2000年、県で総合学習が試行されることになり、希望ヶ丘高校はその指定校に選ばれることになった。北原は、上意下達のシステムに対して複雑な思いをもちながらも、この企画の責任者を引き受けることにした。そして、総合学習として沖縄についての学習を組織したのである。ちょうどその2000年の夏、JICA主催の海外派遣に応募した北原は、そのメンバーに選出され、そこで一人の沖縄の高校教師と出会う。そして、この出会いから、二度とは経験できないであろう特別な沖縄修学旅行が実現した。

2000年に沖縄についての総合学習を行ったあと、翌2001年には生徒たちとともに沖縄についての学びをさらに深めて、その年の冬、修学旅行で沖縄を訪問することになっていた。そして、2001年の夏、北原は沖縄に出かけて、そこで修学旅行に向けての入念な準備を行っていた。その直後に、事件は起きた。

2001年9月11日、世界を震撼させたニューヨークの世界貿易センタービルなどを標的としたテロが起こった。このいわゆる9・11同時多発テロは、世界中に大きな波紋を投げかけたのだが、北原の教師としての再生を賭けた教育実践にも、この波紋が襲ってくるのである。日本の文部科学省が9月28日付で都道府県教育委員会に「海外修学旅行先では米軍施設に近寄らないように」<sup>79)</sup>という内容の通達を送ったことで、沖縄への修学旅行を中止する学校が相次ぎ、関東の諸県においても同じ動きが起こってきたのである。

このときの自粛の嵐はすさまじいものであった。希望ヶ丘高校もまたこの嵐のなかにあった。しかしながら、沖縄への修学旅行に、自分自身と生徒たちの学びの再生を賭けていた北原は、全力を尽くしてこの嵐にあらがった。まずJICAの海外派遣で出会った沖縄の高校教師から現地の様子についてのレポートを送ってもらい、学年団の教師たちとの会議、保護者との話し合い、生徒たちへのアンケートを行い、これらの結果をもって、職員会議に臨んだ。



しかしながら、こうした準備をもってしても、職員会議では、賛同が得られなかった。それでも結論を出すことを延期することで、幾ばくかの猶予を得た北原は、再度、学年集会、保護者との話し合いをもった。そこで賛同してくれた保護者たちに励まされたという。

「ありがたいことに、保護者会では、行かせたいという親が、危ないという親を説得してくれたんですよ。いや、びっくりしましたね。いや、恵まれているなあと思って。その説得の理由がふるっているんですよ。私がテロリストなら、米軍でね、守られた沖縄より、東海村の原発施設にねえ、ミサイル落とすほうが確実に日本を混乱に、首都圏だから、なんの防備もないでしょう、あの辺ね。自衛隊さえいないんだから、あの辺は。ああ、そうだよなあと。

だから、沖縄に行くっていうのは、そんな危ないことじゃないと。それよか、これまで子どもたちが一年とかかけてきた、沖縄学習を無駄にするほうが、教育じゃないって。ああ、いいこと言ってくれるなあって。学年主任は推進の側だから意見を言わないようにしたのね、見ていたのですね。親御さんがどういうふうに、で、質問あったら答えるという感じにしたかった。そしたら説得してくれたんですよ、びっくりしましたねえ。8:2ぐらいでしたよ、だから。」<sup>80)</sup>

どんなに偉大な教師でも、一人の力では学校を動かすことはできない。このような保護者の支えがあったことは、孤軍奮闘する北原にとって、いかに心強いことであっただろうか。そして、粘り強い話し合いの末、三回の職員会議をもち、最終的には校長決裁で沖縄への修学旅行が実現することになった。ただし、日程のみ12月から1月に変更された。希望ヶ丘高校は、自粛の嵐をくぐり抜けたのである。

この修学旅行は、北原にとっても、子どもたちにとっても、忘れられない特別なものとなった。生徒たちは、沖縄に到着すると、どこへ行ってもあらゆる人々から「[来てくれて]ありがとうありがとう」<sup>81)</sup>と声をかけられ、大歓迎を受けたという。反戦地主の阿波根昌鴻さんを訪ねるために出かけた伊江島では、小学生が涙を流してありがとうと言う姿に接し、生徒たちもまた泣いていた。最終日には、JICAの海外派遣で出会った沖縄の高校教師が生徒たちとともにホテルに駆けつけ、希望ヶ丘高校の生徒たちと友情を確かめ合った。この特別な修学旅行の経験は、北原に学ぶこととつながることが生み出す力の大きさを、実感させるものであった。修学旅行を契機として、生徒たちが大きく変わったのである。

「この修学旅行で、生徒はすごく変わりました。まず中退がいなくなりましたからね。例年だったら、一年で20人ぐらい辞めて、二年で10人ぐらい辞めて、三年でまた何名か辞めていくのに、三年になって誰も辞めないですよ。良かったですよ、だから、三年生の

総合学習に対する期待、否応なく高まるでしょう。それから、私たちにに対する信頼感というのはすごく高まりますよね。つまり、最後まで生徒の希望を貫くために、先生たちがやってくれたというのをわかっているんですよ。」<sup>82)</sup>

生徒たちは、沖縄学習と沖縄修学旅行を通して、学ぶこととつながることの喜びを実感した。また、風評被害に苦しむ沖縄を訪問し、そこで人々に受け入れられ、感謝されている自分自身を経験することになった。彼・彼女らはもはや不本意入学の高校生ではなかった。沖縄の人々との関係において、彼・彼女らは特別な高校生であり、信頼の絆で結ばれた高校生であった。その存在を全面的に受け入れてくれる他者との関係のなかで、彼・彼女らは蘇り、そのことによって、教師、大人との関係も再構築されたのである。

#### (ステージ10) 希望ヶ丘高校(二) ～中年期の危機と再生～

このように、北原は、生徒や親たちとの対話を通して沖縄修学旅行を実現した。ところが、この対話の過程で北原が払った代償は大きかった。そもそも職員会議では、修学旅行での沖縄訪問に反対する教師たちが多数派だった。生徒や親たちを巻き込んでの沖縄修学旅行の実現、さらには、沖縄修学旅行での生徒たちの大いなる感動と、企画の成功という結果は、これに反対してきた教師たちの面子をつぶすことでもあった。もともと危機に晒されていた教師たちの同僚性は、深刻な危機に陥り、北原の英雄的な活躍は「学校のなかを二つに裂いちちゃった」<sup>83)</sup>という結果を招いた。この過程で、北原の心身には目には見えない疲労が蓄積していた。

そして、さらなる出来事が追い打ちをかけた。2002年5月、大日本製紙株式会社が自己破産を申請した。東証一部上場、従業員1000名近くを抱える製紙業界の中堅企業が倒産したのである。大日本製紙の安岡工場は、安岡市でもっとも大きな職場の一つであった。倒産に伴い、会社の主力工場であった安岡工場も閉鎖し、そこで働いていた従業員たちは一夜にして職を失うことになった。生徒たちの親のなかには、この会社に勤めていた人々もいて、生徒たちの生活が脅かされることになった。その上、生徒たちにとっても有力な就職先が失われたのである。3年生の学年主任だった北原の双肩には、一人の教師ではいかんともしがたい重い負荷がのしかかってきたのである。

この時、北原はある大きな決断をした。教師を辞めるという決断である。沖縄修学旅行における感動的な体験はあったものの、札幌向陽高校からの8年間、教師であることと、自分らしくあることの折り合いがつかなくなっていた。そして、教師であり続けるために「自分をどこかウツついているところができてしまっていた」<sup>84)</sup>という居心地の悪さを感じていたのである。そして、この決断が、北原の命を救うこととなったのである。

まずJICA(国際協力機構)の国際交流コーディネーターに応募し、そこで採用されたら、

教師を辞めることを決断した北原は、応募書類に必要な健康診断書を作成してもらうために、2002年の9月に病院に出かけた。そこで、何とガンが発見されたのである。胃ガンであった。自覚症状は全くなかったという。教師を辞めて転職する決断ができなかったら、ただぐずぐずと居心地の悪さを抱えながら教師であり続けたら、今の北原は存在しなかったかもしれない。この時、一つのエピソードが語られた。現在、教師たちが置かれている過酷な状況を物語るエピソードであった。

「私の胃ガンを発見してくれた、あの一先生が、医者がですね、おかしいなあって言うんですよ。あれ、酒もタバコも飲まないのに、えーって。何時に寝てるって。はい、9時ぐらいですって。えーって。それで何で胃ガンになるんだって。で、職業は？って聞いたら、いや、高校の教員をやっていますって。ああ、それは、それはもう、それでもう問診終わりですよ。ああ、そうかで、それで納得されてしまう。だからもう多いんだなあって。」<sup>85)</sup>

検査を繰り返して、ガンであることが動かし難い事実になったのが2002年10月末のことであった。そして、2002年12月に入院して、胃を四分の三摘出する手術を受けた。筆者は12月の入院の直前に北原に会い、ガンであることの告白を受けている。大きな衝撃を受け、ただ祈るばかりであった。幸い手術は成功し、1ヶ月の入院ののち、1月下旬にはもう職場に復帰したのである。

ガンという深刻な病を経験したあとでも、教師を辞めたいという気持ちには変わりはない。ただ、この病のため、国際交流コーディネーターに応募することはできず、この仕事に就く道は閉ざされた。この代わりに、病床のなかで教師を続けるための土台となる学問を学びたいという強い気持ちが湧き上がっていた。

「あきらめかけていた大学院は、是が非でも入りたいと思ったのは入院中です。」<sup>86)</sup>

「自分がもうこれから、何ができるかと思ったときに、大学院にやっぱり入りたいと、それは学び直しをしたい、と。」<sup>87)</sup>

そして、入院中に大学院の研究計画書を作成したのである。だが、関門は校長の承諾書であった。教師を続けながら、大学院で学ぶには、校長の承諾書が必要だったのである。ガンという大病を患ったあとの、その病み上がりの身体で大学院で学ぶことを、はたして校長が認めてくれるだろうか。といて認めてくれない場合、教師を辞めたい思いはあったが、家族のある身としては、次の職が見つからない状態で辞めるわけにもいかない。

ところが、北原の心配は杞憂に終わり、校長は北原の大学院進学を認めてくれた。そして、北原はこの時、はじめて校長からあることを打ち明けられた。実は、校長もまたガンに冒され、摘出手術を受け、投薬しながら勤務していたのだった。こうした校長だったからこそ、あの沖縄修学旅行の実現を陰ながら支えてくれたのだろう。病いという共通の痛みを通して、校長と教師がつながったのである。

それからの一年間は、北原にとって、教職生活におけるもっとも大きな転機となった。2003年4月、F大学大学院人文学研究科の門をくぐった。コミュニケーション学科に所属した北原だったが、日本人は二人、他の二十名ほどの大学院生はすべて外国人という環境のなかで、生き生きとした学びを展開していった。

また、同僚性が崩壊の危機にあった赴任校でも、新しい教師が着任し、そこで信頼できる同僚関係が構築された。大病を経て、北原のなかでも大きな変化があった。2003年度、希望ヶ丘高校の最後の年は、1年生の学年主任として、学年団を組織し、朝読書の実施、担任と組んでの家庭訪問など、若い担任教師たちを後ろで支える役割を担うようになった。中年期の教師にふさわしい世代継承の役割をいつしか担っていたのである。北原は2003年の転機について次のように語っている。

「大学院っていうのはすごく大きくて、つまりですね、教職をやるとか、高校の教員を務めるというよりは、やっぱりその、自分が何がしたいかが見えてきたということですかね。」<sup>88)</sup>

学校を一度外側からみるという経験、そしてこれまでの教職経験を踏まえて学び直すという経験が、北原のパースペクティヴを大きく変えていったのである。そして、教師である自己へのこだわりがなくなったとき、逆に教師を辞めたいという思いも消えていったのである。

北原は、希望ヶ丘高校の最終年に8年間にわたった教職アイデンティティの危機から脱出する光を見出した。そして、大病を通して、時間意識の変容を経験し、そこから自分自身の課題が焦点化し、異文化理解教育という学びと探究の軸をもつことになった。さらに、時間意識の変容は、ジェネラティヴィティの受容を生み出し、若い教師たちを見守る立場に自分自身を置くようになった。こうして同僚性が構築され、同時に、北原は新たな教職アイデンティティの再構築を達成しつつあった。

翌年、北原は、希望ヶ丘高校から坂田西翔高校に異動した。坂田西翔高校は、「坂田に普通科進学校をとの地元の強い要望に応え」<sup>89)</sup>、1980年代に創設された比較的新しい学校である。ところが、普通科進学校という当初の思惑は実現せず、1995年からは美術科と音楽科を各一クラス置く、特色のある学校として再編されている。そのような意味では、この高校も1990年代以降の高校教育改革の動向に沿った学校であった。しかしながら、この高校

では生徒の統制においては比較的緩やかであり、特色のある学校の特色の内容が国際交流や芸術教育にあったため、異文化理解教育を実現するという北原の教職アイデンティティと適合していた。そして、北原はこの高校において、新たな教職アイデンティティの下、総合学習としての地球市民教育、さらにはカンボジア・スタディ・ツアーなどの実地学習を企画し、生徒たちを世界とつなげる教育実践を展開することになる。そののち、高校での教育実践のほか、大学の教員養成にもかかわり、これまで学び、経験してきたことを次世代の学校教育を担う若者たちに伝承しつつ、日々新たな学びと新たな関係作りに挑戦している。

## おわりに

北原のライフヒストリーに映し出されたその中年期の教職アイデンティティの危機と再構築の過程は、次のような経路を辿っている。大学を卒業したのち、北原は北海道の公立高校の教師として教職生活を出発している。その新任期には、校内暴力に遭遇しながらも、尊敬できる同僚との出会いによって学校の変革を目の辺りにし、教育実践の可能性を信じることとなる。そしてそこで子どもたちの学びを引き出す教師としての教職アイデンティティを確立している。続いて二校目では、不登校の子どもと出会い、学級経営に苦しむ経験をしながらも、取材旅行を通して日本各地の歴史や文化、そしてさまざまな地域に生きる人々と出会い、そこから社会科の教材を構成することで、教師としての専門的成長を経験している。続いて、三校目では、社会科（地歴・公民）のすべての科目を経験することで教師としての幅を身につけ、さらには家庭を築くことで、次のステージへの準備が整ったかに見えた。ところが、そこから中年期の教職アイデンティティの危機は始まっている。

家庭の問題を解決するために移った四校目の高校は、その学校文化が北原の自己アイデンティティ、そしてこれまで構築してきた教職アイデンティティと真っ向から対立する高校であった。その学校では、形式的で厳格な生徒指導を軸とする教師文化が主流となっており、北原が確立していた子どもたちの学びを引き出す教師としての教職アイデンティティは、現実的なものではないとみなされた。

自己アイデンティティと真っ向から対立する教師の集会的アイデンティティと遭遇することで、北原の教職アイデンティティは深刻な危機に直面することになった。四校目の高校では、ひたすらそれまでの教職アイデンティティを守るだけで精一杯であり、教師としての専門的成長を経験するのは不可能な状況であった。その時に支えとなったのが、北海道の倫理教師たちの研究サークルであるソクラテスの会であった。ソクラテスの会という自己アイデンティティと調和したコミュニティにおいて、過去の教育実践を語ることによって、北原はかろうじて自らの教職アイデンティティを保っていた。

このとき、北原はこれまでの教職生活において築いていた教職アイデンティティが否定さ

れるような厳しい経験に加えて、さらに深刻化した家庭の問題も重なっていた。ついに、北原は、新しい人生を求めて北海道から関東への転居を決意する。そして30代後半で、難関の高校地歴科の教員採用試験を突破して、この決意は実行された。

こうして北原は新たな土地で教職生活を続けることとなった。だが、新天地で配属された高校は、1割ほどの生徒が中途退学するという高校であった。さらには、その高校は、1990年代以降、急速に進展する高校教育改革の潮流のなかで再編されることが決定されていた。北原は、この高校においても、生徒指導を中心とする学校の教師文化と子どもたちの学びを引き出すという自らの教職アイデンティティとの亀裂に、苦しむことになる。

そして、関東地方の公立学校に移ってから3年目の2001年度、9・11同時多発テロから波及した沖縄への修学旅行自粛ムードのなか、北原は、学年集会、職場集会、保護者集会を重ねて、これまで準備してきた沖縄への修学旅行を実現にこぎつける。このとき、生徒たちは沖縄の各地で大歓迎を受けるとともに、現地の高校生たちとも交流を深める経験をした。北原は、この経験を通して生徒たちが大きく変わり、自尊感情と学びへの意欲が生まれ育ち、退学者が減少するという姿をまのあたりにする。

しかしながら、この過程で、反対派と賛成派の教師相互の対立が深まり、学校における同僚性は崩壊の危機を迎え、北原は退職、すなわち教職生活から身を引くことを決意する。ところが、このとき、次の仕事に応募するために行った健康診断でガンが検知され、緊急入院し、手術を受けることになった。北海道の四校目から合わせて8年間も続いていた教職アイデンティティの危機は、北原の身体を蝕んでいたのである。それでも、幸いにして手術は成功し、現在まで再発はしていない。そして、翌年から同僚関係も組み替えられ、かねてからの念願であった大学院で異文化理解教育について研究を行いながら、教師として再出発することとなった。

中年期の危機を乗り越えたのち、北原は関東地方で二校目の学校に赴任した。この学校の文化は、国際交流や芸術教育という特色のある教育内容にあり、子どもたちの学びを中心に据えた北原の教職アイデンティティと調和可能なものであった。北原は、そこで総合学習や国際交流のプロジェクトにたずさわりながら、教師として新たな地平をひらいている。この北原のライフヒストリーには、中年期の高校教師の教職アイデンティティの危機と再構築における象徴的な死と再生の物語が顕著にあらわれているといえるだろう。

本事例研究における中年期の教職アイデンティティの危機と再構築をより凝縮してとらえるならば、次のようになる。この事例では、その中年期の危機は、学校における教師の同僚性の危機と、家庭における自己アイデンティティの危機が、教職アイデンティティの危機と三重に重なるかたちで生じている。場所の変更によって、この危機を乗り越えようとした北原であるが、新たな学校もまた、生徒たちの「学びからの逃走」と中途退学という危機と、学校における教師の同僚性の危機という深刻な危機を抱えていた。北原は沖縄への修学旅行

の実現によって、生徒たちの学びの危機を乗り越えることに成功するが、この成功はかえって教師の同僚性の危機を深めてしまう。この背景には、すでに進行していた高校再編の動きがあり、高校再編を推進する高校教育改革があった。

北原の教職アイデンティティの危機はいよいよ深刻になり、退職を決意するに至った。ところがこのとき、大病が発見されて、九死に一生を得る。この過程で、校長との絆が生まれ、翌年は、同僚性も回復し、安定した教職生活が甦っている。そして、次に異動した学校では、総合学習や国際交流にかかわり、子どもたちに世界と出会わせ、そこから創造的な学びを組織する教師として、再出発している。

北原のライフストーリーには、8年間にわたる長く厳しい教職アイデンティティの危機が見られた。そして、教職を辞める決意をするところまで追い詰められたのだが、そのときに発見された大病とそこからの回復が時間意識の変容を生み出した。このとき、何がもっとも自分にとって大切なのかを考え、新しい教職アイデンティティの軸を見出している。さらには病気という経験は、校長との心の通い合いを生み出し、これまで校長や管理職とのあいだに壁を感じていた北原に、和解を生み出している。上の世代との間に世代継承的な関係を築くことができた結果として、今度は北原自身が、若い教師たちを見守り育てる立場に立ち、学校における同僚性の再構築が実現している。こうした一連の過程を経て、北原はつながり合い、学び合う教師としての新たな教職アイデンティティを再構築している。

#### 注

- 1) 『イギリスの教育改革と日本』佐貫浩(高文研, 2002)
- 2) 『オッリベッカ・ヘイノネン「学力世界一」がもたらすもの』オッリベッカ・ヘイノネン+佐藤学(NHK出版, 2007)
- 3) 北原豊の聞き取りの記録(Ⅰ), p.1. (2004年3月20日), 以下, 「北原インタビュー(Ⅰ)」と記す。
- 4) ライフストーリー社会学者の小林多寿子は、フランスのライフストーリー社会学者であるベルトーの言葉を引用しつつ、ライフストーリー・インタビューにおける聴き手の構えとして「できるだけ話を中断しないこと」の大切さと「しゃべりすぎ、たえず話をさえぎること」への注意を記している。(桜井厚・小林多寿子編, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房, p.88.)
- 5) 北海道で日雇い労働を指す言葉として用いられるデメンあるいはデメントリとは、英語の day man に由来する言葉だと言われている。
- 6) 北原インタビュー(Ⅰ), p.10.
- 7) 同上.
- 8) 同上, p.11.
- 9) 同上, p.16.
- 10) 同上, pp.16-17.
- 11) 同上, p.11.

教師の中年期の危機と再生 (II)

- 12) 同上, pp.11-12.
- 13) 同上, p.12.
- 14) 同上, p.11.
- 16) 同上, p.16.
- 17) 同上, p.13.
- 18) 同上.
- 19) 同上, p.14.
- 21) 同上.
- 23) 当時、人気絶頂にあったキャンディーズの解散は1978年4月4日のことである。この時、高当校3年生の北原は東京・後樂園球場の最終コンサートに出かけている。
- 24) 北原インタビュー (I), pp.14-15.
- 25) 同上, p.6.
- 26) 同上.
- 28) 同上, pp.7-8.
- 29) Illich, I. D., 1970-1971, *The Deschooling Society*, Harper & Row. (東洋・小澤周三訳, 1977, 『脱学校の社会』東京創元社.)
- 30) 灰谷健次郎は1971年に小学校教師を退職し, 1974年に『兎の眼』を出している。(灰谷健次郎, 1974, 『兎の目』理論社.)
- 31) 厚岸水産高校における若き教師と荒れた生徒たちとの格闘と交流を綴った教育実践記録である。著者の両角憲二は2011年現在, 私立和光高等学校の校長を務めている。(両角憲二, 1982, 『バラサン岬に吼えろ—教育とは生徒にはれぬくこと…』民衆社.)
- 32) 北原インタビュー (I), pp.7-8.
- 33) 同上, p.9.
- 34) 竹内の授業には東京都足立区の中学校教師として非行少年と向き合っていた能重真作もゲストとしてやってきて, 北原は影響を受けたという。(能重真作, 1979, 『ブリキの勲章—非行をのりこえた45人の中学生と教師の記録』民衆社.)
- 35) 同上, p.19.
- 36) 同上, pp.19-20.
- 37) 同上, p.1.
- 38) 重松守。北海道の倫理、地理教師。のちに北原らとともに倫理教師の研究会であるソクラテスの会を結成する(仮名)。
- 39) 北原インタビュー (I), p.20.
- 40) 同上.
- 41) 同上.
- 42) 同上, p.21.
- 43) 野々村厚夫。北海道の倫理教師。のちにソクラテスの会を結成し, それを主宰する(仮名)。
- 44) 北原インタビュー (I), p.21.
- 45) 同上, pp.21-22.
- 46) 北原が教職に就く直前の1983年2月15日, 東京都町田市立忠生中学校で, 教師が果物ナイフで生徒を刺すという事件が発生している。



- 47) 同上, p.22.
- 48) 同上, p.21.
- 49) 「学校内にある普通科への商業科の劣等感」という意。
- 50) 北原インタビュー (I), p.24.
- 51) 同上, pp.24-25.
- 52) 同上, p.25.
- 53) 同上, p.26.
- 54) 同上, p.27.
- 55) 同上.
- 56) 同上.
- 57) 同上, p.28.
- 58) 同上, p.29.
- 59) 同上.
- 60) 同上.
- 61) 同上, p.30.
- 62) 同上.
- 63) 同上, pp.30-31.
- 64) 北原は佐藤学の論文を読んで、このときの自分自身の実践に対する意味を見出したという。「のちに佐藤学先生が(中略)戦争の授業というのは、死者の声を蘇らせることなんだと書いてくれたので、ものすごく勇気を与えられましたね。僕のやりたいことはやはりそうなんだと。死者じゃないかもしれないけど、生きている人の痛みとか、生きている人の、生き残っている人の声を、今伝えないと、死者の声になってしまうと。そういう生の声を、生じゃないけど、連れてくることはできないじゃないですか、でも、子どもたちは確実に感じてくれるんじゃないかなと。僕は声を届ければいいんじゃないかなあと思った」(北原インタビュー (I), p.31.)。佐藤学の論文は(佐藤学, 1997, 「戦争の記憶と教育—死者の声を甦らせること」『ひと』太郎次郎社, 第294号, pp.1-8.)
- 65) 北原インタビュー (I), pp.32-33.
- 66) 同上, p.34.
- 67) 同上, p.2.
- 68) 同上, p.3.
- 69) 同上, p.2.
- 70) Goodson, I. F., 2003, *Professional Knowledge, Professional Lives : Studies in Education and Change*, Open University Press.
- 71) 1999年に北原が立ち上げたカンボジア・モザンビーク支援のNPO組織(仮称)。
- 72) 北原インタビュー (I), p.36.
- 73) 北原のほか、重松守、野々村厚夫、そして長嶋雄大の四名である(仮名)。
- 74) 仮称。
- 75) 北原インタビュー (I), p.35.
- 76) 同上, p.40.
- 77) 北原豊の聞き取りの記録 (II), p.2. (2010年5月11日), 以下, 「北原インタビュー (II)」と

## 教師の中年期の危機と再生(Ⅱ)

記す。

78) 同上, p.3.

79) 朝日新聞 9月29日夕刊に「修学旅行, 沖縄敬遠一文部省通知, 自粛を招く」という記事が掲載されている。

80) 北原インタビュー(Ⅱ), pp.12-13.

81) 同上, p.13.

82) 同上, p.15.

83) 同上, p.16.

84) 同上, p.17.

85) 同上, p.4.

86) 同上, p.7.

87) 同上, p.17.

88) 同上, p.22.

89) 坂田西翔高校(仮称)のウェブサイトの学校長挨拶による。

## 謝辞

本稿は2011年度東京経済大学個人研究助成費(11-17)による成果の一部である。また、本稿の作成は、北原豊先生がそのライフストーリーを惜しみなく語って下さったことに負っている。記して感謝申し上げたい。